

東アジア子ども学

交流プログラム

報告書

2009



East Asia Child Science
Exchange Program



本プログラム創設者、日本代表

小林 登

(東アジア子ども学交流プログラム日本代表、CRN所長)



Kobayashi Noboru ●医学博士。東京大学名誉教授。国立小児病院名誉院長。1927年東京生まれ。1954年東京大学医学部卒業。国際小児科学会会長、国立小児病院医療センター初代センター長、国立小児病院院長などを歴任。現在は、チャイルド・リサーチ・ネット (http://www.crn.jp) 所長、ベネッセ次世代育成研究所所長、子どもの虹情報研修センター・センター長、日本子ども学会代表などを務める。

東アジア子ども学交流プログラム・2009年度報告書を出版するにあたり、代表として、ひと言挨拶を述べる。

2009年度は、東アジア交流プログラムの会議を東京と上海で2回開くことができ、実り多き年であった。お茶の水女子大学で9月12日(土)、13日(日)に開かれた日本子ども学会の学術集会である第6回「子ども学会」の前日に、東アジア子ども学交流プログラムの第4回会議が開かれた。また、5月に上海で開かれる予定の会議が、新型インフルエンザ流行のため延期となり、11月2日(月)、3日(火)に第5回の会議として上海で開催された。いずれも成功裡に終えることができた。

第4回のメインテーマは「言葉の発達と脳科学」で、日・中・韓の言葉の発達の共同研究会

議と合わせて開催されたため、韓国の研究者も初めて参加し、正に「東アジア」の会議となった。

第5回のメインテーマは「情動の子ども学」という興味深いものであり、反響もよかったが、残念ながら、従来通りの日・中の研究者のみによる会議となった。今後の交流プログラムでは、韓国側にも参加を続けて頂き、正に「東アジア」として発展させたいものである。

"Children at risk, whenever and wherever," という考え方ががあるが、東アジアの中国も、韓国も、そして日本も、現在子どもたちの直面する問題の中心は心理・行動的なものであり、その要因は単一ではなく、社会的な要因も加わって複合的である。その昔、子どもたちの問題の中心が、感染症や栄養失調のようなものであった時代は、病原菌あるいは栄養素という単一

の原因によってそれらは起こっていたが、現在の問題はそうのように単純に割り切れない。だからこそ、「子ども学」「Child Science」というような学際的な立場、包括的な立場が必要なのである。第4回の東アジア子ども学交流プログラムの会議が、第6回「子ども学会」の前日に開かれたことは、外国からおいでになった方々に、私たちのやっている「子ども学」というものを考えていただける良い機会であったと思われる。

東アジア子ども学交流プログラムは、東アジアのそれぞれ文化の異なる国々の研究者が、学際的、包括的な「子ども学」の立場で、問題解決に必要な情報を交換し、それを発展させる場である。この報告書が、その情報提供の役を少しでも果たせることを願いたい。

中国代表 朱家雄

(東アジア子ども学交流プログラム中国代表、華東師範大学教授)



Zhu Jiaxiong ● 華東師範大学教授、学前教育研究所所長。中国学前教育研究会副理事長。上海市幼児教育研究会副会長兼秘書長。中国教育部の国家プロジェクトである「学前教育学科養成目標基準とカリキュラムの研究および実践」、「幼児教育改革実験研究」などを担当する。

東アジア子ども学交流プログラムを2009年度も日本と中国で2回開催することができ、誠に嬉しく思います。

東アジア子ども学交流プログラムは、東京大学名誉教授であり、日本国立小児病院名誉院長、CERN所長でもある著名な小児科医の小林登先生の主導で創設され、中華人民共和国駐日本国大使館、日本子ども学会、日本赤ちゃん学会、異文化比較学会、日中教育交流会議等の協賛を受け、(株)ベネッセコーポレーションの支援によって運営されております。

その主旨は、育児、保育、幼児教育等に関わる仕事と研究に従事している東アジア各国の大学と大学教授の相互訪問や交換講義を通じて「子ども学」の普及とグローバル化を実現し、子どもに関する各種の問題を解決し、子どもの生活環境を改善して、すばらしい未来を創るために貢献することにあります。私はこのプログラムの中国側責任者を拝命しましたことを誠に

光栄に存しております。

私は、小林登先生が提唱していらっしゃる「子ども学」の主張に心より賛同いたします。小林登先生との数多い交流および、5回の東アジア子ども学交流プログラム活動を含む、さまざまな学術活動へ参加する中で、医学、小児科学、脳科学、心理学、教育学、社会学、人類学、法学、工学、建築学等の自然科学・社会科学・人文科学が有機的に結びついてはじめて、子どもが直面する各種の問題を総合的に探求し、解決できるものであると、深く会得致しました。

東アジア子ども学交流プログラムの活動を組織し、それに参加する過程において、中日両国の、子どもに関するさまざまな学術分野の専門家が一堂に会し、互いに切磋琢磨し、相互に協議するという光景を目にいたしました。両国トップの専門家が学術的な相互の働きかけにより新しい思考をほとばしらせ、新たな戦略と方策を生み出すことができるということを、私は

肌で感じ、感銘を受けたのです。

東アジア子ども学交流プログラムのこれまでの5回の活動では、「子ども学の意味」「異文化の比較研究」「子どもにやさしいチャイルドケアリング・デザイン」を「言葉の発達と脳科学」および「情動の子ども学」のテーマが議題となりました。中日両国の子ども研究に関する理論と実践に携わる者による熱い討論は、学術的発展を促進したばかりでなく、中日両国の交流と友情を増進させました。

私は、東アジア子ども学交流プログラムがこれまでの経験を総括した上に、さらに大きい収穫を得ることができるように切に望んでおります。我々が力を合わせて協力し、これまでと変わることなく、絶え間なく努力すれば、我々はきっと今よりもいっそうの成功を収めることができる、確信しております。

(発表順)

小泉英明

Koizumi Hideaki



理学博士。株式会社日立製作所役員待遇フェロ、独立行政法人科学技術振興機構社会技術研究開発センター「脳科学と社会」研究開発領域総括。専門は分析科学・応用脳科学・環境科学。1971年東京大学教育学部基礎科学科卒業。日立製作所基礎研究所所長、同研究開発本部技師長を経て、2004年から現職。

姜勇

Jiang Yong



教育学博士。華東師範大学副教授。専門は教師教育、子どもの発達・教育基本理論、比較教育。1973年生まれ、北京师范大学教育学院で博士号取得。中国福利会幼稚園の勤務を経て現職。

張明紅

Zhang Minghong



華東師範大学副教授。専門は就学前の子どもの言語教育、0-3才児の発達と教育、就学前の子どもの社会教育など。中国学前教育研究会幼稚園課程および教学專業委員会委員、国家教育科学「第10次五カ年計画」のテーマである「0-3歳児の早期ケアと発達」専門家メンバー。

内田伸子

Uchida Nobuko



学術博士。第20期日本水術会議会員。お茶の水女子大学教授。専門分野は発達心理学・認知心理学。1946年群馬県生まれ。1968年お茶の水女子大学文教育学部卒業、1970年同大学院人文科学研究所修了。1998年同大学院人間文化研究科教授。日本発達心理学会常任理事、日本教育心理学会常任理事。

李基淑

Lee Ki Sook



教育学博士。梨花女子大学教授、梨花女子大学付属・梨花子ども研究院院長。梨花女子大学幼児教育学科を卒業し、アメリカ George Peabody College For Teachers に修士および博士学位を取得。韓国幼児教育学会会長、世界幼児教育機構 (OMEPI) 韓国会長を歴任し、現在環太平洋幼児教育学会 (PBCERA) 韓国会長を務める。幼児教育カリキュラムと教育プログラムに関する著書多数。

周念麗

Zhou Nianli



心理学博士。華東師範大学副教授。専門分野は発達心理学、親子関係、統合保育。1995年お茶の水女子大学文教育学部卒業、1998年東京大学大学院教育学修士号、2003年中国華東師範大学心理学博士学位取得。2004年、米 Arizona State University 客員研究員として乳幼児の情緒発達研究を行った。2006年5月、2007年3月、国際交流基金フェローとして、名古屋大学で統合保育について研究した。現在、華東師範大学就学前教育学部心理研究室主任。

榊原洋一

Sakakihara Yoichi



医学博士。お茶の水女子大学教授。日本子ども学会副代表。専門は小児神経学、発達神経学、特に注意欠陥多動性障害、アスペルガー症候群などの発達障害の臨床と脳科学。1951年東京生まれ。1976年東京大学医学部卒業。東京大学小児科講師を経て、現職。

渡辺富夫

Watanabe Tomio



工学博士。岡山県立大学情報工学部情報システム工学科教授、情報工学部部長・研究科長。1983年東京大学大学院工学系研究科産業機械工学専攻博士課程修了、工学博士。山形大学工学部情報工学科助手、同大学専任講師、助教授、1992-1993年米国ブラウン大学客員研究員、1993年岡山県立大学情報工学部情報システム工学科教授を経て、現職。

山本登志哉

Yanamoto Toshiya



教育学博士。早稲田大学教授。子どもとお金研究会代表。日本質的心理学会理事・編集委員。法と心理学大会常任理事・編集委員長。1959年青森県生まれ。呉服屋の丁稚を経て京都大学文学部・同大学院で心理学専攻。奈良女子大学在職時に文部省長期在外研究員として北京師範大学に滞在。

沈月華

Shen Yuehua



中国福利会国際和平婦幼保健院主任医師、上海第二医科大学教授。中華周産期学会全国委員、上海周産期学会顧問、上海小児科学会新生児学顧問。専門分野は周産期保健、優生優育指導、乳幼児健康教育。1967年上海第二医科大学を卒業し、臨床医学に長年従事。1980年から新生児・周産期保健優生優育諮問に従事。1989-1990年、日本北里大学病院NICUで研修し、第1回国際周産期学会に出席。

華愛華

Hua Aihua



華東師範大学就学前教育学部部長、中国就学前教育会理事、遊びとおもちゃ専門委員会主任、中国陶行知研究会就学前専門委員会主任。専門分野は就学前基本理論、0-3歳児の早期教育指導、就学前の子どもの遊び。担当する研究プロジェクト・幼稚園の遊びに関するカリキュラムの研究、教師が提供する素材と幼児の遊び行動との相関関係研究、0-3歳児の早期ケアと発達に関する研究、幼稚園教材研究制度の研究など。

谷村雅子

Tanimura Masako



医学博士。国立成育医療センター研究所成育社会医学研究部部長。1972年、日本女子大学家政理学科卒業。東京医科歯科大学人類遺伝学教室助手、米国テキサス大学遺伝学センター研究員を経て、1987年より現研究所（旧国立小児病院小児医療研究センター）にて、環境と遺伝の両面から小児の健康・発達を研究。特に、メディアの影響、児童虐待、小児がん、遺伝性腫瘍など。日本小児科学会子どもの生活環境改善委員会委員。

000	巻頭言
002	講演者プロフィール

005 第1章 ● 言葉の発達と脳科学 〈東アジアでの研究と実践〉（日本・東京にて）

006	① 外国語としての第2言語の習得と脳科学	小泉英明
010	② 〈早期閱讀〉を基盤に、幼稚園カリキュラムについて	朱家雄
014	③ 上海市幼稚園教諭の文化的状況についての調査	姜勇
019	④ 中国の幼稚園における〈早期閱讀〉のデザインと実施	張明紅
022	⑤ シンポジウム…幼児のリテラシー習得に及ぼす社会文化的要因の影響〈日・韓・中比較〉	
029	⑥ 質疑応答	

031 第2章 ● 情動の子ども学（中国・上海にて）

032	① 何故人間は心をもったのだろうか、脳の三位一体学説から情動の役割を考える	小林登
037	② 中国における幼児メンタルヘルス教育の実践と研究	朱家雄
042	③ 人を引き込む身体的コミュニケーション技術	渡辺富夫
046	④ 所有に関する行動の日中文化比較…子どもはいつ「中国人」になるのか？	山本登志哉
051	⑤ ベビーマッサージとアタッチメントについての研究	沈月華
057	⑥ 親の期待と幼児の発達について—中国11都市3000名の幼児の調査結果—	周念麗
062	⑦ 教育的視野の中の子どもの遊戯	華愛華
065	⑧ 赤ちゃんはヒトに興味をもつ—赤ちゃんの対テレビ行動の解析より—	谷村雅子
069	⑨ 日本グッド・トイ展示会の紹介	
070	⑩ 会場の声	

072 ※付録：「子ども学」関連語一覧（日・中・英対照）

第1章

言葉の発達と脳科学 ～東アジアでの研究と実践～

(2009年9月11日 日本・東京にて)

■主催…チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)、お茶の水女子大学G・COE
■共催…(株)ベネッセコーポレーション、ベネッセ次世代育成研究所
■後援…中華人民共和国駐日本国大使館、日本子ども学会、日本赤ちゃん学会、
日中教育交流会議



外国語としての第2言語の習得と脳科学

小泉英明

Koizumi Hideaki

株式会社日立製作所役員待遇フェロー

●ヒトの言語と遺伝子配列の変化

言語の発生や獲得に関しては、言語学の中でも諸説ありまして、何が本当に正しいかは、これからの研究を待たなければなりません。ですから、明らかになっていることと、そうでないことを慎重に見極める必要があると思います。まずは、進化の視点からお話をさせていただきます。

人間の第一の特徴は、コミュニケーションにあります。階層的な文法を進化の中で獲得したことが、人間と他の動物を分ける大きな点だと思っています。どういう進化の過程の中で、その能力が獲得されたのかはまだ謎ですが、現在さまざまな研究が行なわれています。

私たちに最も近い種と言われるのはチンパンジーです。遺伝子の解析をすると、DNAの配列はヒトと1%強の違いしかありません。そ

の本当にわずかな差に、我々が言語を獲得した原因が含まれているのではないかという可能性が指摘されています。

そのような研究に関連する一例として、英国で文法の一部が理解できない家系の子どもたちについての研究成果が2001年に発表されたことがあります。正確に言えば、まだ作業仮説の段階と考えられますが、転写制御因子と言われる遺伝子の中のFOX P2という部分に2か所だけ突然変異が見つかりました。

実は、ヒトのFOX P2という遺伝子の配列は特異的、つまり他の動物たちとは異なるもののなのです。そのことから、30億個ある塩基配列のわずかな数か所が変わったことにより、人間は言葉を話すようになったのではないかという仮説が提起されています。

また、遺伝子のFOX P2というのは、自閉症等にも関係すると言われる基本的な遺伝子で、神経と神経の接続、シナプスの形成など、さまざまな機能の発現にも関係する可能性があると言われています。

● 相対音感と言語の起源

最近、私は個人的に相対音感が言語の起源を知る上で重要だと考えています。音楽家にとって重要なのは絶対音感であると言われることがあるために誤解されやすいのですが、相対音感こそがヒトとして進化する過程で後に生まれてきた、ヒトの本質と深くかかわるものなのです。実際、生物学的には絶対音感の方がより根源的なものであり、昆虫などは絶対音感の持ち主です。

人間にとって相対音感がなぜ重要なのかを簡単な例でお話しますと、例えば、お父さんが「おはよう」と子どもに言ったときと、お母さんが「おはよう」と言ったときとは、当然、ピッチつまり音程は違うわけです。本当は別物であるはずなのですが、我々は全然気にしない。両方とも同じ「おはよう」と受け取るわけです。これは相対音感があるからです。このように音の高さが違って同じ範疇でとらえることができるということが、言葉の起源と関係があるのではないかと、私は感じています。実際、チンパンジーに相対音感はあるほどありません。

● 第一次感覚野と臨界期

外国語の学習というとすぐ出てくるのが臨界期という話です。コンラッド・ローレンツやヘスの刷り込みの研究、これが大変よく知られ

ているわけですが、生後24時間経ってしまったら刷り込みはまったく行われないうという非常にきれいな実験結果が、1959年に出版されています。

それで、人間にもこういう臨界期があるかのごとくに言われることがよくあり、ときに大きな誤解を生むケースがありますが、明瞭な臨界期というのは視聴覚など感覚野にかかわるものが多く、限定的なものであると思われます。例えば発音のようなもの。これはクルルの有名な実験がありますが、母音や子音の聞き取りというのは子音の方が先で、1年ぐらいで感覚が閉じて、聞き取れなくなってしまう。我々が年を取ってからいくらLとRを聞き分けようとしても、その差を海外の人のように正確に範疇認知することはできないと言われています。そういう第1次感覚野に近いところは臨界期が明確に見られませんが、高次のところは明確な臨界期が見られないケースが多いわけです。

現在では、臨界期がどういうメカニズムで発生しているかというのが少しずつわかってきています。これはJSTのCRESTでヘンシュ先生もされている研究ですが、神経伝達物質のGABAが臨界期にかかわっているというものです。このGABAの働きを亢進させるような物質、ここですと言いますとベンゾジアゼピンなのですが、この物質で臨界期を早める、つまり学習できる時期を早めることができるのです。一方、いつまでも若い子どものように学習を続けたいということならば、その逆を行えばいいわけです。今度は拮抗薬の、GABAのantagonist、この場合はDMCMで実験していますが、それを与え

ると臨界期が後ろへ引き延ばされる。少し年とってからでも若いときと同じようにやれるということがわかってきました。もちろん、動物での話の段階です。

●外国語の学習と年齢

年齢によって言語の学習にどのような差が生まれるのか、そのような研究がなされています。例えば、スペイン語を母国語とするさまざまな年齢の人々が、第2言語として英語を学習した場合の習得度合いについての研究結果があります。全部で61名ぐらいを対象にしたものですが、若いときに移住してきた人たちはかなり高い第2言語の英語の能力を得られています。

一方で、臨界期を過ぎても母語話者のレベルを獲得することが可能であるという例もあります。

これは英語のケースですが、オランダ人が大きくなってから始めたのに完全にネイティブと同じようにしゃべれるようになったという研究です。しかし、このケースで気をつけなくてはいけないのは、両方とも言語としては距離の近いものだということです。そのために差し引いて考える必要がありますが、実際にこういうことが起きることがあります。

それから、逆に、子どものうちから言語を学んでも、母語話者のレベルに達しないケース、つまり小さいときから英語をきちんと教えたにもかかわらず、英語がマスターできなかったケースも報告されてい

ます。

例えば、英語話者の家族の子どもがフランス語で教える学校で学ぶ。結果としては子どもによってフランス語のレベルがすぐばらついたということです。フランス語がうまくしゃべれるようになった子どももいれば、全然そうではない子どももいるのです。

●学習における動機付けの重要性

学習について考えるには、動機付けの役割もとても重要です。何としてもやらねばならない、そう思ったときにドーパミンが出てきますが、それが記憶の定着に大きく寄与しているということが、データで明らかになり始めています。つまり、大事なものは熱い心なのです。何とかしてやりたい。興味がある。それがあると臨界期なんかどこかへいつてしまうわけです。

人間の脳は構造的に中心部から外へ向かって進化しています。ですから、進化の初期の、これは爬虫類とほとんど同じ形をしています。生命を維持する脳、脳幹が中心部にあります。古い皮質というのは生きる力を駆動する脳、辺縁系で、ここが働かないことにはいくら知識があっても宝の持ちぐされです。

一番後になって進化してきたのは、まさに人間らしい脳、前頭前野を含めた大脳新皮質です。そこが知育によっていくらか充実しても、内側のところからそれをやりたい、何としても実行したい、そういうパッションが生じなかつたら、知能は十分に生かされません。特に乳幼児

期に発達する脳の内側の生命力とかかわる教育、あるいは保育、あるいは育児がとても大切だと考えられます。

●脳機能の連携と乳幼児の発達

乳幼児期の脳の一番根元のところの発達はとても重要なのですが、現在はまだその研究は欠落しています。もちろん行動学的な貴重なデータはいろいろ出てきていますが、脳の中がどうなっているのか、子どもが生まれて、あるいはお腹の中で、どういう形でその脳が育っていくのか、どのように神経が接続されていくのか、ここがよくわかっていないのです。

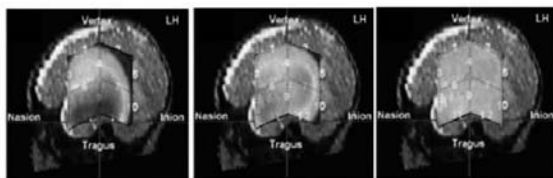
我々が考えている機能というのは、別々に見えていて、実は全部が連携しています。覚醒、睡眠、情動、運動、思考、もちろん言語も、すべて連携している。その事実を表す典型例は、自閉症スペクトラム障害です。例えば、カナリー型の場合は顕著です。言語の障害をもっているし、運動の障害もあるし、睡眠の障害もある。それらは全部リンクをしているのです。乳幼児期に、それらの機能がどのように脳の中でリンクし、発達を遂げるのかを明らかにするというのが、これから神経科学の大事な課題の一つだと考えられます。

こういう脳の総合的な機能の連携について、いろいろな方々と共同して研究していますが、研究を通じて、私が個人的に感じているのは、芸術というものの価値です。芸術の本質は何だろうか、芸術というものが人間の発達にとって、とても大切なものではないかというこ

とです。

また、言語も芸術同様に脳機能の連携と密接に関係しています。言語を考えるとときには、言語というのは、本当は何のためにあるんだ、何の役に立つんだろう、子どもたちに言語を教えるとしたらどこから入ったらいのか、そこを学際的に考えていく必要があるでしょう。

母国語を聴いた際の新生児脳活動



母国語普通会話

テープ逆回し

無音

新生児：生後5日以内

母国語：イタリア語

In collaboration with J. Mehler's group, International School for Advanced Studies in Italy, *Proc Natl Acad Sci USA* (2003)

脳科学と言語

© 2009 Hitachi, Ltd. Hidesaki KOIZUMI

「早期閱讀」を基盤に、幼稚園カリキュラムについて

朱 家雄

Zhu Jiaxiong

華東師範大学教授

●サマリー

絵本作品『さかなはさかな』に対する二通りの解釈と推論で、世界と中国の幼児教育理論と実践の発展の方向をわかりやすく述べる。また、歴史と地域のカテゴリーを踏まえ、現在の就学前教育界が関心を寄せる「早期閱讀」※の意義と機能を考える上で必要となる背景を紹介する。さらに、報告者のこれまでの研究実績から出発し、自身の早期閱讀との出会いから実施経験を踏まえて、特にここ数年間に早期閱讀を基盤として、中国で強力に推し進めてきた、幼稚園カリキュラムの制定と実施について述べる。

※早期閱讀とは、幼児期に絵本や活字を読ませる読書活動を指す。
詳細は巻末72ページの用語一覧を参照

●幼児の早期閱讀の背景

——世界と中国の幼児教育理論と実践の方向性

(1) 一つの絵本に対する二通りの解釈と推論

レオ・レオニの絵本作品に、『さかなはさかな』というお話がある。このお話について異なる解釈をすることで異なった教育的意義を導き出すことができる。内容は以下の通りである。

小魚とおたまじゃくしは仲良しで、いつも一緒に池の中で泳いでいた。

ある日、おたまじゃくしは蛙に成長し、池を離れ、友だちの小魚の前からいなくなった。小魚は、魚と同じだったおたまじゃくしに、どうして足が生えたのかとても不思議だった。しかも自分の前から、池から、姿を消してしまった。しばらく経ったある日、蛙はご機嫌な様子で池に戻り、小魚に、池とは別の、もう一つの多彩な世界で、羽の

ある鳥や、四本足の牛や、歩くことができる人間などを見たと話した。小魚は、蛙が話した池の外の世界の、羽の生えた魚や四本足で角が二つある魚、おとことおんなと子どもの魚が歩く姿などを想像してみた。さらにはどうしても行つて見たくなり、一生懸命陸に飛び上がったのだが、すぐ死にそうになり、ちょうど餌を探していた蛙に助けられ、池に帰り着いた……。

ロマンチズム的な学者は、『さかなはさかな』は、教育者に対しかなり啓発的な意義のあるお話であり、次のように解釈できると考える。「子どもは子ども」「子どもは子どもの世界の中で自由に生活し、想像を膨らませ、限らない創造の機会をもっているのだ」(小魚は、蛙が話してくれた池の外の世界、羽の生えた魚、四本足で角が二つある魚、おとことおんなと子どもの魚が歩く姿などを想像してみた)、「子どもは、自分の経験を基礎にして学習を進め、その学習は自主的に行なっている」「子どもがいったん自分の生活環境から離れると、すぐに問題が起きしまう」(さらにはどうしても行つて見たくなり、一生懸命陸に飛び上がったのだが、すぐ死にそうになり)……。

これをもとに、この物語を考えてみよう。

- ・ 同化することは、子どもの学習の根本であり、遊びは子どもの基本的活動である。
- ・ 学習の過程は、子どもがすでに持っている自己のパターンを環境に合わせてようと努力する過程である。
- ・ 教育は、子どもの論理的発達のレベルに合わせるべきである。

- ・ 教えることは、発達に従属すべきもので、相反するものではない。

もし、ロマンチズム的傾向を取り去り、このお話に別の解釈を試みると、教育者に対してまた別の示唆を与えるだろう。具体的に言えば、「魚」は、いずれは「岸に上がる」ことをしなければならぬ。これは「進化」の必然である。つまり、「子どもの想像と創造は、自らの経験が基礎になるのはもちろんであるが、子どもの成長について言えば、それだけでは全然足りない」「子どもはより知識の多い大人の援助のもとに学習させるべきだ」……。

これによって、この話を考えてみよう。

- ・ 「魚が岸に上がる」ために、しっかりと準備をして、『さかなはさかな』のままで留めてはならない、そうしなければ「魚」はいつまでも一歩前進ができないままだ。
- ・ 効果的に教えることは、子どもの発達を促進することができる。
- ・ これにより、カリキュラムの実施と教師教育などの面でも、お話の解釈をさらに広げることができる。
- ・ カリキュラムは、子どもの発達に合わせていくだけでなく、例えば文化の適合性や政治の優先度等、その他多方面での意義も有する。
- ・ 何を教えればよいのかわからないというのでは、教師は務まらない。だから教師は教育や教授法を学ぶ中で、多方面の知識と能力を身につけるべきである。

このような理論で『さかなはさかな』のお話を解釈し、考えていくと、「教育は子どもの発達の法則に従うだけでなく、その他の多くの面にも配慮しなければならない」ことがわかってくる。そして教師は必ず実際に教育や教授法の中の最も基本となるものを確実に身につけられるようにしなければならない。だが、こうした理論の方向で、このお話を解釈し、推し広げていくと、多くの問題提起につながり、疑問も湧いてくる。ただし、これらの問題や疑問は、例えば以下のように、やはり教育実践の第一線から湧いてくるものである。

- ・効果的な教育や教授法をどのように実施すればいいのだろうか。（すなわち子どもの発達のニーズに合っていて、その発達を促し、さらに社会のニーズにも合うようなもの）
- ・教師が身につけるべき知識と技能とはどのようなものだろうか。
- ・効果的な教育法や教授法を実施できる教師をどのように養成するか。

(2) ユネスコの呼びかけ

ユネスコは1982年からすでに全世界に向けて「全ての人に読書を」という呼びかけを行い、社会における全ての人が読書をし、書物と読書を欠かすことのできない生活の一部とするよう求めた。80年代より、先進国数カ国では、子どもの知的発達の重点を読書能力の育成に移ってきている。

アメリカでは、ブッシュ夫人が、教育イニシアチブ“Ready to Read, Ready to Learn”を推し進めた。夫人は、ファーストレディの任にあ

る間ずっと努力を惜しまず、全ての子どもが基本的な読書能力を身につけられるよう保証していくことを誓った。

1998年9月から1999年8月は、イギリスの読書年であった。ブランケット教育大臣が、読書年を進めることでイギリス人の読書に対する態度を改め、読書の楽しさを取り戻し、「全ての人が読書をする国を建設する」(Build a Nation of Readers)と発表した。

●私の研究と論点

(1) 私の研究

1986～2000年

- ・構造主義を如何に早期教育の実践に運用するかに取り組んできた。結果、幼児に自主的活動の中で言語能力を発達させることは効果が低いということがわかった。
 - ・「遊びを基本活動とする」という声が主流である中で、「学びも基本活動である」という観点を出し「遊びと学びを有機的に結合すること」を主張。
 - ・幼稚園実践の中で、早期閲読は幼児の言語教育に効果的であることに気づき、上海浦南幼稚園で早期閲読を実践した。
- 2000年以降

- ・数多くの幼稚園教育の実践研究に参加し、さまざまな幼稚園カリキュラムを作成し、幼稚園教師用や幼児用の各種書

籍を執筆した。

・幼稚園カリキュラムの中で、幼児言語学習の内容と素材を徐々に充実させてきた。一部のカリキュラムでは、早期閱讀を中心とするカリキュラムを試みた。

・マルチメディアで早期閱讀のカリキュラムを編成し、効果的にカリキュラムを実施するようできた。

(2)私の論点

・早期閱讀は生涯学習の基礎である。幼児期に、読書を経由し、学習の成功へ通ずる、一本の道を敷いてあげなければならない。

・早期閱讀は幼児の言語発達に独特の価値をもつばかりではなく、幼児はそれにより読書の楽しみを味わい、読書習慣を身につけ、一人で読書することも可能になる。

・早期閱讀の多くが絵本を通して行われるものである。物語の中に論理的関係が存在し、前後の絵につながりがある。幼児はすでにもっている知識や経験を活用して絵や物語の意味を理解することが可能になる。

・幼児の心身の特徴に基づき、早期閱讀が提供する内容は幼児の想像力を発達させることを主とすべきである。児童文学作品や童謡は言葉や表現が生き生きとして、色使いが鮮やかで、ストーリーが面白いので、子どもに好まれ、受け入れやすいものであろう。



上海市幼稚園教諭の文化的状況についての調査

汪寒鷺・姜勇・陳妍

Wang Hanlu · Jiang Yong · Chen Yan

華東師範大学

●問題提起

「我々のこの時代において、文化は一つの決

定的な力である」Lazalo (1999)。教師は

ひとつの「文化」的存在として、「文化」と密

接に関わる教育の使命を担っている。「教育

人」としての教師、その文化状況は、教師の

業務の発展にとって重要な鍵となる。教師の

発展と教育の革新の可能性が広がるのか、制

限されるのか、その鍵は教師文化の中に多く

潜んでいるのである。

文化的生活状況は、教師の個々の文化状況

の重要な構成部分として、教師の余暇生活様

式と文化的活動状況を体现することができ

以外に、我々がここから着手して、さらに教師の文化状況の内容に踏み込んで考えていくための一助となる。

近年における国内外の教師文化に関する研究を概観すると、主に「集団文化」に焦点が当てられており、研究対象は主に大学および小・中学校に集中している。例えば、Kinze (2003) は、異なる文化集団の文化的知識

および異なる文化的背景の教師と子どもがお互いに理解し合う方法や文化的影響力を参考に教師文化の価値の研究を進めている[1]。

Stinson (2006) は、教師の集団文化を発展させるための12項目の対策を提案した[2]。Soetaert (2004) は、集団文化が教師の教

育実践に与える影響について指摘した[3]。中

国内の学者の龐海芍(パン・カイシャク)ら(1999)は、理工系大学の教師の文化的素養について調査と分析を行った[4]。胡振学

(2006)は、さらに進んで幼稚園を拠点とした研修文化を作り、教師の仕事力の向上を提案した[5]。

ところで、このように国内外の学者は、常に教師文化の集団性に関心を寄せ、集団文化の特徴や役割に偏重するあまり、かえって集団文化を構成する教師の個々における文化の実状をよく把握していないと思われる。幼稚園教師の個々の文化生活の実状についての研究は乏しい。

●研究調査の方法

本研究はオリジナルのアンケート（内部一
致性係数0.89）を作成し、教師の文化的生
活の内容・好み・目的・具体的なタイプお
よび文化的生活方面での毎月の支出などを
調査した。上海の19の区・県内の17の幼稚
園に320部の教師対象アンケートを配り、
304部の有効回答が得られた。

●結果とその分析

(1)幼稚園教師の文化的生活状況の総体研究

文化的生活の中で、教師の「最も多い」の
回答は、インターネットをする・テレビを見
る・本や新聞を読む・ショッピングに出かけ
ることで、教師の「最も好き」である回答は、
ショッピングに出かける・インターネットを
する・睡眠をとる・テレビを見ることであっ
た。「最も多い」と「最も好き」を比べると、「
家事をする」と「子どもの世話をする」の差が
大きく開いていた——図1参照。また、教師が

インターネットをする一番の目的は教育関連
の資料を調べるためであった。

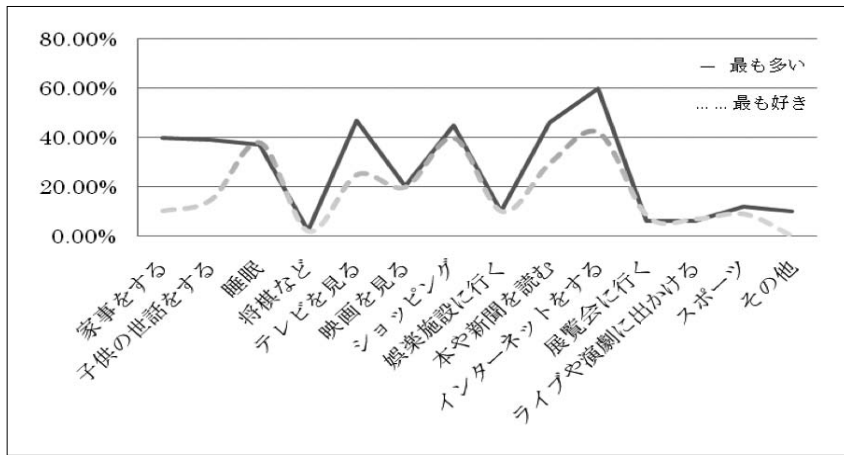


図1 幼稚園教師の余暇文化活動の内容と好み
Figure 1 The Main Items and Preferences in Teachers' Cultural Life

テレビのチャンネルと番組のジャンルを見
ると、幼稚園教師がよく視聴している上位3
つはそれぞれ、生活ファッション関連チャン
ネル・ニュースチャンネル・娯楽チャンネ
ル、娯楽番組・報道番組・生活関連番組で、
教師が娯楽ファッション関係とニュース類を
特に好んでいることがわかった。「娯楽で暇
をつぶす」ことは教師がテレビを見る最大の
目的である(83.1%)。映画では、ハリウッ
ド映画と香港映画が二大人気で、大陸映画・
日韓映画・ヨーロッパ映画の割合が均等であ
る。テレビドラマでは、香港・大陸・韓国が
大部分を占め、日本のドラマは最下位であっ
た。

インターネットとテレビ視聴以外に、教師
が最も多く行なっているのは、読書や新聞を
読むことで、書籍の種類は、まず生活ファッ
ションで、次は軽い小説類で、教育専門書の
類は第3位で、第4位の文学との差は小さ
かった。教師が読書する目的は、主に生活の
趣味を増やすこと(63.8%)と娯楽を楽しむ
こと(59.1%)である。

40.1%の幼稚園教師が毎月文化的生活面へ

使うお金は、51～100円で、これは出費が最も多い層であるが、0.6%の教師は毎月の文化的生活方面に全く出費しない——図2参照。

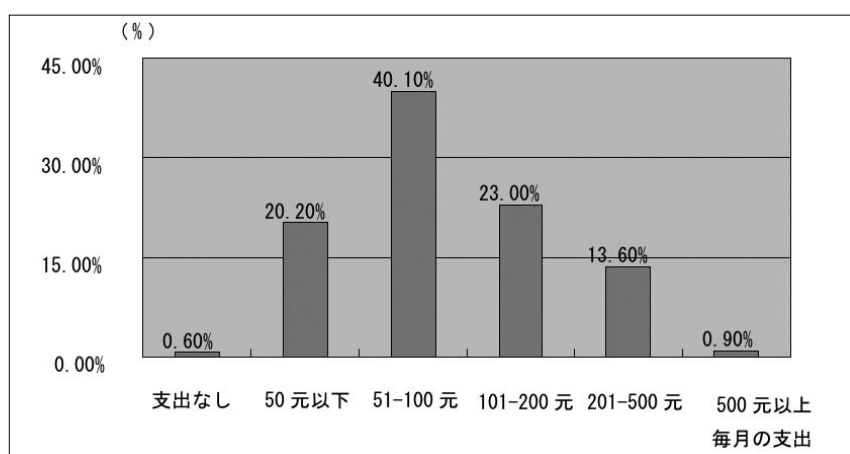


図2 幼稚園教師の毎月の文化的生活への支出
Figure2 Teachers' Monthly Expenditure on Cultural Life

(2) 幼稚園教師の文化的生活状況の違いの比較

幼稚園教師の文化的生活は主に年齢によって違いが表れることが、調査によってわかった。文化的生活の内容は、20～30歳の教師とその他の年代の教師との違いが最も大きく、特に30～40歳の教師との違いが最も多い。家事・子どもの世話・映画鑑賞・街でのショッピング・娯楽施設に行く・インターネットをするなどの項目では、2つの年代の教師の違いが顕著に表れていて、2つの年代の間になり重要な転換点があることがわかる——表1参照。文化的生活の好みでは、各年代の教師の「家事をする」に対する違いが最もはっきり表れていた——表2参照。

● 考察

(1) 理想と現実

教師の余暇の時間では、「家事をする」と「子どもの世話」について、教師の「最も好き」と「最も多い」の回答にかなりの開きがある。これは、「女性特有」とも言えるが、教師が自身の文化的生活の幅や時間を削られていること

を反映している。

教師の毎月の文化面への支出金額は、51～100元に集中し、人数の割合は40.1%である。2007の現在の「農民工」（出稼ぎ農民）の文化的生活状況の調査報告の結果によって、20%近い出稼ぎ農民が毎月文化的生活面に、51～100元を支出していることがわかっている[6]。これでは、文化的レベルがより高く、収入もより高い教師集団が行う文化的生活面への実際の投資としては、私たちが理想とするレベルを実現しているとは思えない。こうした現象が起こる原因と思われる一つには、教師が幼稚園で提供されている文化施設や福利を利用することによって、書籍類やインターネットなどの支出が軽減されていることが考えられる。二つめに、幼稚園教師の収入は出稼ぎ農民より高いとはいえ、その生活レベルを維持するだけの出費をした残りはそう多くないので、さらに文化面への出費をたくさんい気持ちがあること。また三つめに、教師自身が、文化面にお金を使う必要性を感じていないか重視しておらず、どちらでもよいと考えていることがある。

表❶ 幼稚園教師の文化的生活の内容の違いについての統計
Table 1 Post Hoc Test for Teachers' Main Items in Cultural Life

		家事をする	子どもの世話	映画鑑賞	ショッピング	娯楽施設利用	本や新聞を読む	インターネット
年齢	比較年齢	Mean Difference(I-J)						
20-30歳	30-40歳	-0.38*	-0.52*	0.24*	0.25*	0.10*	0.30*	-0.38*
	40-50歳	-0.66*	-0.13	0.33*	0.12	0.15	0.25*	-0.66*
	50歳以上	-0.81*	0.19	0.33	0.45	0.15	0.30	-0.81*
30-40歳	40-50歳	-0.28*	0.38*	0.09	-0.12	0.04	-0.05	-0.28*
	50歳以上	0.43	0.71*	0.09	0.21	0.04	0.01	0.43
40-50歳	50歳以上	0.15	0.32	0.00	0.33	0.00	0.04	0.15

表❷ 幼稚園教師の文化的生活の好みの違いについての統計
Table 1 Post Hoc Test for Teachers' Main Items in Cultural Life

		家事をする	映画鑑賞	ショッピング	本や新聞を読む	インターネット
年齢	比較年齢	Mean Difference(I-J)				
20-30歳	30-40歳	-0.04	0.12	-0.05	0.01	0.22*
	40-50歳	-0.23*	0.23*	-0.06	-0.06	0.20
	50歳以上	-0.40*	0.29	0.50	0.57*	0.12
30-40歳	40-50歳	-0.19*	0.11	-0.01	-0.08	-0.02
	50歳以上	-0.36*	0.17	0.55*	0.58*	-0.10
40-50歳	50歳以上	-0.16	0.06	0.56	-0.50	-0.08

注：*” p < .05

(2)「休閒」と「修身」

幼稚園教師の文化的生活状況の最も大きな特徴は、余暇と娯楽である。全体的に見て、睡眠・テレビ視聴・インターネット・ショッピングに出かけるなどの活動は余暇娯楽活動に属する。細部で見ると、本や新聞を読むことと言っても、教師の好みは、やはり生活ファッション流行関係・エンターテインメント小説などの読み物である。幼稚園教師集団の中で視聴率が最も高いのは娯楽番組である。教育専門書籍・ニュースチャンネル・報道番組なども教師が比較的良好に見るが、教師が書物や雑誌を読んだり、テレビを視聴する主な目的は、のんびり楽しみたい、趣味を広げたいということである。

「休閒(シューシェン、余暇の意味)」と「修身(シューシン)」は、発音上は少しの違いだが、内包するものは大きく違う。一方は娯楽、一方は教養で、言わば文化的生活中身の質と最終結果という関係である。教師の文化的生活が、もし、ただ単に「余暇(休閒)」中心で、「修身」という効果がなかったら、なんと残念なことだろう。しかし、教師は仕事で疲れ果

てて、一息つく暇もないのが現実で、いったん暇な時間ができると、自ずと娯楽を選んでストレスを和らげているのであろう。そこに「修身」しなさいと言えば、さらに疲れてしまうのではないだろうか。

ドイツの哲学者ヨゼフ・ピーパー (Josef Pieper) は、このような考えを述べている[7]。余暇は文化の基礎であるという観点から、余暇は、ごく普通の人生哲学であって、ライフスタイルでもあり、暇な時間に、じっくり聞いたり見たり、深く考えたり、想いをめぐらせたりすることは、世の中への理解を深めることができる、この上なく楽しい。暇な時間がなかったら、人間は思想活動ができないし、文化も生まれようがない。「余暇 (休閒)」が「暇」を生み、「暇」と同時に「修身」にもってこいの文化的生活の時間を得られるということとは、考えてみれば、教師にとってもっと良いことではなかろうか。

(3) 自国文化と外来文化

外来文化が自国文化に浸透していくのは、初めは一冊の本、一本の映画、一つの連続ドラマのような小さいことに過ぎないだろう。

しかし、それがだんだん強大な文化的衝撃力に変化してしまうのである。

幼稚園教師が選ぶ映画をみると、国内映画はハリウッド映画や香港映画の狭間で最もシェアが小さく、国内ドラマは、香港や台湾、ヨーロッパ、韓国のドラマに押されて力を失っている。外来の映画やテレビ作品の方が、教師の気晴らしとしての満足度が高いのかもしれないし、あるいは、上手な宣伝や、内容・制作・技術のすばらしさで、人々の心を虜にしているのかもしれない。

このことから、もう一度中国の自国での立場をじっくり考えざるを得ない。自国に在る我々は、「傍目八目」と言う如く、対局者だからわからないのか、それともずっと外来文化を味わってきた我々は、傍観者としても「傍目八目」とはいかずはつきりわからないのであるか。費孝通(1997)は、「文化自覚」について論じた。文化自覚とは、ある文化の中で生活している人がもっており、その文化の由来や形成過程、特徴や発展の方向を理解していることを言う[8]。中国文化と外来文化の関係が、「囲碁」のような対戦関係から「和

して同ぜず」になり、「文化自覚」への過程がだんだん進んでいく時、あらゆる中国の伝統文化と自国文化に対する再確認が自ずと生まれてくるだろう。

参考文献

- [1] Charles K. Kinzer, Xiaodong Lin, The Importance of Technology for Making Cultural Values Visible: THEORY INTO PRACTICE (J), 2003, 42 (3) : 234-242.
- [2] Lynn Tinson, David Pearson, Beverley Lucas, Developing a learning culture: twelve tips for individuals, teams and organizations, Medical Teacher (J), 2006, 28 (4) : 309-312.
- [3] Ronald Soebert, Andre Mottart, Ivo Verdoodt, Culture and Pedagogy in Teacher Education, The Review of Education, Pedagogy, and Cultural Studies (J), 2004, 26 : 155-174.
- [4] 龐海芍等, 「理工科大學教師文化素養調查与分析」, 高等教育研究 (J), 1999, 1 : 75-79.
- [5] 胡振學, 「新課程背景下, 提昇教師文化素養的實踐研究」, 中國教育與教學 (J), 2006, 4 (10) : 34-37.
- [6] 文化部文化市場司, 華中師範大學全國農民工文化生活狀況調查課題組, 「當代中國農民工文化狀況調查報告」 [M] 北京: 中國社會科學出版社, 2007 : 12, 17-19.
- [7] ヨゼフ・ピーパー, 「閑暇 文化的基礎」 [M] 北京: 新星出版社, 2005 : 91-92.
- [8] 費孝通, 「反思・對話・文化自覺」, 北京大學學報 (哲學社會科學版) (J), 1997, 3 : 15-22, 168.
- [9] 塞繆爾・亨廷頓, 勞倫斯・哈里森, 「文化的重要作用」 [M] 北京: 新華出版社, 2002.
- [10] C・恩伯, M・恩伯, 「文化的變異」 [M] 沈陽: 遼寧人民出版社, 1988.
- [11] 衣俊卿, 「文化哲學十五講」 [M] 北京: 北京大學出版社, 2004.

中国の幼稚園における『早期閱讀』のデザインと実施

張 明紅

Zhang Minghong

華東師範大学副教授

●はじめに

2001年に中国教育部が『幼稚園教育指導要領（施行）』を公布した後、中国で幼児教育に携わる多くの者がこれまでになかった情熱をもって幼稚園早期閱讀教育活動に関心を注ぎ、理論および実践の両面で研究活動を展開している。中国学前教育研究会カリキュラムおよび教学専門委員会は2002年、2004年、2009年の計3回にわたって全国幼稚園早期閱讀教育學術シンポジウムを開催し、活動を展開、推進してきた。現在、中国幼稚園早期閱讀教育は、もはや単純な学科方式の教育内容・教育方法の枠組みに限定されることなく、多次元整合カリキュラム方式へ向けて発展している。

●幼稚園早期閱讀教育における中国の文化的傾向

早期閱讀活動において中国が一番力を入れて検討しているのは、早期閱讀における中国の文化的傾向である。たとえば中国の子どもが好む早期閱讀の読本はどのようなものか？ 中国の幼稚園で行う場合、どのような形式があるか？ 中国文化の価値観と行動様式はどのように次世代に伝えていくのか？ などである。そのほか、中国の子どもの創造性・探求性の方向についての研究を進めている。たとえば、中国の特色ある子どもの創造性発達の土台の構築を試み、幼児が早期閱讀過程で創造的な探求的学習を行うよう促進し、子どもが幼いころから言語運用学習と創造性を探求する楽しい体験を得られるようにするなどである。また、中国の子どもの批判的思考に対しても調査研究を行っている。中国の長い歴史において、その教育文化は子どもに対して、独立した観察・評論・分析・判断・論証等によって構成される綿

密な思考と決定能力の育成に関心を注ぐことが少なかった。中国の幼児教育カリキュラム（早期閲読を含む）の作成においては、中国の文化背景の特徴と結び付けながら、幼児の批判的思考の萌芽・発達に対し、特に関心を注いだ。

●幼稚園早期閲読教育目標の構築

次に、中国の特色に富む幼稚園早期閲読教育目標体系を構築した。主に幼児の書き言葉学習への興味を高めること、本を好きになること、「自ら本を読む」よい習慣を育てることである。いろいろな記号に興味をもって文字を観察し、文字に対する好奇心と探求心をもつことは、幼児が書き言葉と話し言葉の関連性を認識するのに役立ち、また幼児が早期閲読のスキルや、書き言葉を観察・模倣・予想する能力等を身につけるのにも役立つ。

書き言葉に対する子ども들의意識と行動について、以下のようないくつかの重要な問題を検討し、解決してきた。

- ・早期閲読は文字を読ませるべきか、それとも絵本を読ませるべきか。
- ・絵本を読む際の早期目標と文学作品を閲読する教育活動にはどのような違いがあるか。
- ・早期閲読の目標をどのように立てるか。ステップをどのように分けるか。

●閲読内容素材の選択

さらに、「子ども中心」の幼稚園早期閲読教育の素材について研究した。その内容は主に、子ども들의絵本の閲読、遊びの中の閲読、生活の中の閲読、環境の中の閲読などの多元的な組み合わせである。またその素材としては、童話、童謡、科学知識、子ども向けの散文などの絵本が中心となる。

■生活の中の閲読

(上から、観光地の地図、洗濯機の説明書、衣類の洗濯表示)

天涯海角风景区游览线路图

图例

大门

用量指示表 (先浸泡再洗涤, 效果更佳)

用法	机洗	手洗
洗涤剂匙	1匙	2/3匙
1500克衣服 内附有量匙	1匙	1/4匙
衣物重量	4-5kg	2-3kg
用水量	45L	30L
用水量		3-5L

使用滚筒洗衣机时
●请根据衣物的污迹程度使用1/3匙至最多2/3匙(25g)。
●为确保洗衣粉充分溶解, 请先将衣物放进洗衣机内, 再将洗衣粉均匀撒入。

KANGWEI

洗涤方法:

- 30℃水洗涤
- 不可氯漂
- 中温熨烫
- 阴处晾干

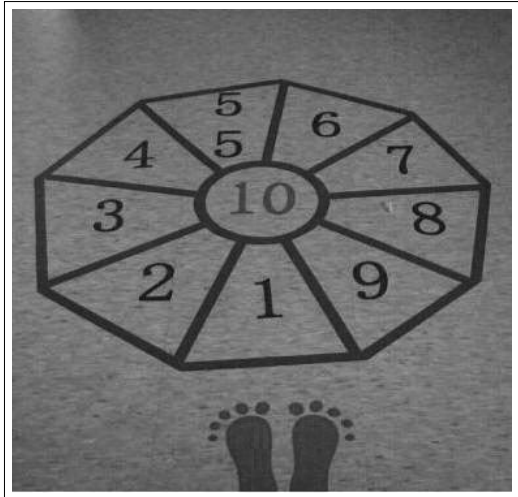
厂名: 广州康威集团有限公司
地址: 广州增城新塘康威工业大厦
电话: (020)38796838 82766911
传真: (020)38796880 82766788
邮编: 510620
网址: HTTP://WWW.KANGWEI.COM.CN
E-mail: kangwei@public.guangzhou.gd.cn

● 読読教育活動の実施

最後に、さまざまな形式の幼稚園早期読読教育活動をデザインし、実施した。具体的には、オープン式の図書閲覧室の設置など、子どものためのよい読読環境を作り、読読エリア活動を推奨して子どもに自由に関読させたことが挙げられる。

日常的に異なる年齢の子どもが集まって行う読読活動、教師の組織するグループでの読読活動、教師の個別読読指導、幼児の小グループの探求的読読活動、幼児の自主的読読活動、幼稚園が指導する保護者による親子読読活動などがある。

■遊びの中の読読（「美容院ごっこ」料金表、数字遊び）



■読読の環境づくり



■グループでの読読活動



■環境の中の読読（週間天気予報）



シンポジウム

幼児のリテラシー習得に及ぼす社会文化的要因の影響

―日韓中国国際比較研究― 2008年度日本調査の結果

第1部 各国からの調査報告

日本（内田伸子）

問題

幼児期のリテラシー（読み書き能力）の習得は子どもの認知発達と強い関連がある。また、語彙能力は知能発達や学力適応度の指標になることが明らかにされてきた（内田・1989・2007、東他・1995）。

リテラシー習得に社会文化的要因はどのような影響を及ぼしているかについて明らかにする目的で、お茶の水女子大学グローバルCOE「格差セ

目的

ンシティブな人間発達科学の創成拠点」ではリテラシー習得の日韓中越蒙国際比較調査を推進中である。2008年度に実施した日本調査の結果を報告する。

方法

1. 幼児調査…3歳児773名、4歳児914名、5歳児920名、合計2607名を対象にして、個別に臨床面接を実施し、①読み書き能力 ②音韻的意識 ③絵画語彙検査 ④アルファベット・リテラシーを測定した。さらに、⑤リテラシーの道具的価値への気づきについて、個別に臨床面接を実施した。

2. 保護者調査…対象児の保護者1780名を対象にして、子ども観、早期教育への取り組み、子どもの向社会性、しつけスタイル、家庭の蔵書数、教育投資額、収入等についてアンケート調査を実施した。

●調査報告、シンポジスト…内田伸子（お茶の水女子大学教授・日本）、李基淑（梨花女子大学教授・韓国）、周念麗（華東師範大学副教授・中国）
●司会…榎原洋一（お茶の水女子大学教授・日本）

3. 保育者調査：対象児が通園している保育所・幼稚園の保育者193名を対象にして幼児期の文字教育、保育形態、保育環境の設定、子どもへの関わり方などについてアンケート調査を実施した。

結果

I. リテラシー習得に及ぼす経済格差の影響

幼児のリテラシー習得と家庭環境・保育環境との関連についての主な結果は次の通りである。

第1に、1995年調査に比べて、リテラシー習得が早期化（5歳児48%→80%）した。

第2に、リテラシーは3、4歳児では性差（ χ^2 ： $p < 0.001$ ）が見られるが、5歳になると性差はなくなる。語彙力は4、5歳児で性差（ χ^2 ： $p < 0.001$ ）が見られる。

第3に、リテラシーは経済格差（ $CP = 700$ 万円）の影響が見られ（ $p < 0.001$ ）、特に4歳まで顕著である。語彙力は、加齢に伴い経済格差の影響が顕在化し、5歳児では差が最も大きくなる（ $p < 0.001$ ）。

第4に、保育形態（一斉保育か子ども中心主義保育か）によって、語彙能力に差が見られ（ $p < 0.001$ ）、自由保育の場合に語彙能力が高い。

第5に、共分散構造分析により、リテラシーの習得については3、4歳児までは、経済格差要因（家庭の経済格差、教育投資額差）、親の学歴、家庭の蔵書数、しつけスタイルの影響を受けるが、

5歳児では、経済格差要因の影響はなくなると明らかになった。

第6に、清音の音韻的意識（内因）は5歳児で天井になり、リテラシー習得の教授効果（外因：一斉保育や早期のドリル学習など）を顕在化させる。

第7にしつけスタイルは「共有型」「強制型」「自己犠牲型」の3因子が抽出された。強制型は低所得層に多く、共有型は高所得層に多い。子どもとおなじ目線に立つ共有型しつけスタイルはSDQ尺度の向社会性の発達と強い関係があることが明らかになった。子どもと対等に楽しい経験を共有するような親の関わりが将来のよい対人関係やコミュニケーション能力の発達に資することが期待される。

II. 語彙力（II学力基盤力）の習得としつけスタイルの関係についての詳細な分析

1. しつけスタイルの分類

しつけスタイル尺度について因子分析を行ったところ、「共有型」（ふれあいを重視し、子どもとの体験を享受・共有する）・「強制型」（大人中心のトップダウンのしつけや力のしつけ）・「自己犠牲型」（子どもが何より大切で、子育て負担感が大きい。育児不安が放任に二極化）の3因子が抽出された。

3つのしつけスタイルのうち、最も標準化得点

の高いしつけスタイルに個人を振り分けた。その結果、共有型33.4%（573名）、強制型35.6%（612名）、自己犠牲型31.0%（532名）とほぼ均等に分類された。

2. しつけスタイルと語彙・リテラシーの関連

それぞれの得点について分散分析を行った結果、リテラシーではしつけスタイルによる差は表れなかったが、語彙においてしつけスタイルの主効果が有意で（ $F(2,1708) = 11.16, p < 0.001$ ）、強制型よりも共有型において語彙の得点が高いと明らかになった（Tukey法： $p < 0.1$ ）。

3. リテラシーと語彙の規定要因に関する重回帰分析

リテラシー・語彙に影響する要因について重回帰分析を行った結果、子どもの年齢、性別、母学歴、収入は全ての得点に対して有意な関連がみられた。強制型と共有型しつけについては、語彙のみ関連がみられた（表1）。さらに分析を行ったところ、語彙得点に対する収入×強制型の交互作用が有意だった（ $\beta = 0.05, p < 0.05$ ）。強制型しつけの影響は、収入低群では認められたが（ $\beta = -1.0, p < 0.05$ ）、収入高群では認められなかった（ $\beta = 0.1, p = 0.70$ ）。収入×共有型の交互作用は有意ではなかった（ $\beta = 0.1, p = 0.63$ ）。

表1 リテラシーと語彙の規定要因に関する重回帰分析

	語彙得点		語彙得点		語彙得点	
	β	r	B	r	B	r
子どもの年齢	.61**	.60***	.55***	.55***	.71***	.71***
子どもの性別	-.08***	-.08**	.08***	.08***	.13***	.12***
収入	.06**	.12***	.09***	.13***	.07***	.10***
母学歴	.12***	.11***	.08***	.07**	.04*	.01 n.s.
強制型しつけ	-.05**	-.04*	-.03 n.s.	-.02 n.s.	.01 n.s.	.03 n.s.
共有型しつけ	.05**	.05*	-.01 n.s.	-.01 n.s.	.02 n.s.	.02 n.s.
R ²	0.4		0.33		0.52	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

考察

リテラシーは5歳になると経済格差や性差要因の影響がみられなくなるが、語彙力（学力基盤力の指標）は加齢に伴い経済格差要因の影響が顕在化する。また、しつけスタイルや家庭の蔵書数も語彙力と強い正の関連をもっている。

収入低群で、なおかつ強制型しつけの傾向が高い場合に語彙得点が有意に低下することが確認さ

れた。特に注目されるのは、低収入層であっても、共有型しつけスタイルをとれば、語彙能力は低下しないという点である。しつけスタイルは親が子どもへの関わり方を変えることにより、制御可能である。

以上より、大人が子どもと対等な関係で触れ合いを重視し、楽しい体験を共有する家庭の子どもは語彙力が豊かになることが示唆された。

家族で団欒や会話を楽しむ雰囲気の中で子どもは内発的な知的好奇心を発揮して環境探索を行い主体的に学んでいるのであろう。

韓国（李基淑）

問題

幼児のリテラシー能力の発達には親と保育者の重要な関心事の一つである。これは韓国だけでなく、日本、中国においても同様であらう。特に、韓国の親は子どもの早期学習と関連して、読み書き能力に多くの関心を注ぎ、現在は早くから子どもの読み書き発達に関する早期教育が行われている。これは、読み書きに関するリテラシー能力の発達が小学校での学習達成度に影響を及ぼし、全ての教科がこのような読み書き能力と関連しているからであらう。読み書き能力が学習の基礎となることを考慮すると、早くから読み書きさせようとする親の気持ちを一概に非難できないところも

あらう。幼児期のリテラシー能力を向上させる方法に慣れていない親は、ドリルに頼り、反復される学習だけを強調しかねない。また、保育者も読み書きに関する明確な知識をもたず、すなわち、幼児にいつ、どのように教えればよいのかに関する明確な教育観を持たないまま幼児に読み書きを教えていることもある。

目的

幼児のリテラシー能力の発達は幼児個人と関わる多様な要因と、幼児が生活している家庭および幼児教育機関など、関連要因によって影響を受ける。一般に、幼児の読み書き能力に及ぼす幼児個人に関連する要因として、幼児の年齢、性別、社会的情緒的能力が挙げられ、家庭環境要因としては家庭の社会的経済的水準、兄弟関係、親の養育態度および信念が挙げられ、教育環境要因としては保育者、クラスの規模と教授法などが挙げられる。

そこで、本研究では幼児の個人的要因、家庭環境要因、教育環境要因の3つの要因を考慮して幼児の読み書き能力の発達に及ぼす影響を検討し、さらに、韓国・日本・中国の3カ国の幼児を対象に読み書き能力にこれらの要因がどう関わるのかを比較検討する。

方法

本研究は、ソウル、京畿、仁川地域を中心に

国公立・市立幼稚園と区立・市立保育園（44ヶ所）の幼児、保育者、保護者を対象にした。幼児向けの調査、保護者向け質問紙は3歳児（442名）、4歳児（604名）、5歳児（578名）を対象に合計1624名の検査用紙と質問紙を回収して分析した。

結果

本研究の結果、読み書き能力の発達と関連のある全体の傾向は以下のとおりである。

第1に、幼児の年齢、性別、家庭所得水準によってリテラシーの習得に差があるかを調べた結果、幼児の年齢が上がるにつれリテラシー得点が上がリ、全ての年齢で差が出た。

性別によってもリテラシー得点に差があり、女児は男児より得点が高かった。しかし、性別の違いは加齢に従い、小さくなる傾向があった。英語得点については性別による差はみられなかった。また、家庭の所得によって幼児のリテラシー得点に違いがあることが判明したが、加齢に従って高所得集団と低所得集団の差は小さくなる傾向があった。しかし、英語得点では年齢が上がっても差が維持され、5歳に所得水準による違いが確認された。

第2に、幼児の年齢によるリテラシーの下位要因の相関は低年齢の方より明確な相関が確認された。

すなわち、3歳児では読み、書き、語彙間の相関が顕著に現れる一方、4歳児では弱い相関、5歳児では読み得点と語彙得点間で弱い正の相関があった。

第3に、家庭の所得および環境によって幼児のリテラシーに違いがあるのかを検討した結果、家庭の所得によって親の日常生活スタイル、所蔵図書数、子どもへの進学希望範囲、私教育実施比率に差があることが確認された。

これと関連して教育投資額が高いほど、幼児のリテラシー関連得点が高いことがわかった。これは、家庭の所得が高いほど、教育投資額も有意に増加するといった結果と関連があり、高所得家庭の高い教育投資額が低年齢幼児のリテラシー能力に影響していると解釈できる。家庭の養育環境における所得と教育への投資は初期には影響するが、幼児の年齢が上がるにつれ、その影響力は低くなっていることがわかる。

第4に、幼児のリテラシー習得と関連して親の養育態度の要因を分析した結果、「共有型」（子どもとの相互作用を多くし、一緒にいるのを好み、子どもの意思を尊重する意思疎通方式を好む）、「指示型」（子どもとの疎通が一方的で、子どもの意思よりは決まった指示と規則が優先される）、「犠牲型」（親が子どもに全てを合わせて、親の希望をあきらめて子どもの要求に合わせる）、「統制型」（子どもを統制し、体罰を駆使する）などの

4つの類型が抽出された。所得による養育態度を検討した結果、高所得集団では「共有型」が多く、低所得集団では「指示型」が多かった。「犠牲型」、「統制型」は高所得集団と低所得集団ともに現れ、所得による差はみられなかった。

家庭所得による幼児の社会的能力の違いを検討した結果、高所得集団で向社会的得点が高いことが明らかになった。また、親の養育態度得点を比較した結果、高所得集団で「共有型」の養育点数の平均が高く、低所得集団では「指示型」の養育得点の平均が高かった。親の養育態度による子どもの社会的能力は「共有型」でもっとも高く、以降「統制型」、「犠牲型」、「指示型」の順で表れ、相互作用のかつ双方向的な意思疎通方式を行う「共有型」の養育が向社会的な子どもの気質に影響を与えることがうかがえる。従って、所得水準と関係なく、親の養育態度が相互作用的で双方向的な「共有型」になるように親が努力するとき、子どものより肯定的な社会的傾向が発達していくことが示された。

考察

幼児のリテラシー習得および発達に関連した研究は、幼児は成人のように読み書きができる以前であっても読み書きを学ぶ過程にあり、学校に行く前からすでにリテラシーに関する多くを学ん

でいると主張する (Ferreiro & Teberosky, 1992; Goodman, 1980; Teale & Sulzby, 1986)。このような観点からすると、読み書き能力は認知的で社会的な活動であり、家庭から始まるのである。従って、幼児が日常生活で体験するリテラシー環境を把握し、このような環境が幼児のリテラシー習得および発達に及ぼす影響を研究することは非常に重要である。本研究は幼児のリテラシー習得および発達に影響する要因を検討したもので、究極的には家庭と集団保育の場、両方で活用できる方法を模索し、今後、日韓中3か国間の比較により、興味深い知見が得られることを期待する。

中国 (周念麗)

問題・目的

内田 (1989:2007)、東他 (1995) の研究結果によると、幼児期のリテラシー (読み書き能力) 習得は子どもの認知発達と強い関連がみられ、語彙能力は知能発達や学力適応度を予測する指標となっていることは、幼児期のリテラシー発達の重要性を示唆した。

中国では、幼児のリテラシー発達について、まだほとんど調査が行われていないのが現状である。先行研究によると、経済的に豊かな家庭ほど、子どもの認知能力が高いことから、社会全体

が激しく変化し、特に貧富の差も広がりつつある中国の子どもたちの読み書き能力の実態を把握することは非常に重要である。また、中国で経済改革が行われ、所得の差は保護者の育児スタイル、また幼児のリテラシー習得にどのような影響を与えているのかを調べるために、お茶の水女子大学内田伸子教授がリーダーとなっている「リテラシー習得の日韓中越蒙国際比較調査」に参加し、2009年4月から7にかけて上海で調査を行った。ここでその結果を報告する。

方法

上海市の保育所 (1カ所) と幼稚園 (計20カ所、私立2、公立18) の園児1779名 (3歳児596名、4歳児615名、5歳児568名)、保護者1040名および保育士118名。経済状況における差異を考慮し、親の所得に応じて、高い経済レベル、中間レベルおよび低いレベルにある3つの行政区からそれぞれ7つの園を選んだ。

2. 調査内容

3〜5歳の幼児に個別の対面調査を実施し、子どもたちの読み、書き、語彙、アルファベット読みの習得度、文字の道具的価値への気づきなどについて調べた。対象児の保護者および在籍している保育所・幼稚園の保育者に対してアンケート調

査を実施した。

結果

1. 幼児のリテラシーの実態に関する調査結果

(1) 年齢差

漢字の読み、書き、語彙、しりとりおよび英語のアルファベット平均得点は、年齢が上がることも上昇し、年齢による差は顕著であった。5歳児において、各方面の能力が飛躍的に上昇する傾向がみられた。これは子どもの発達上の要因とも関連しているが、中国で非常に重視されている幼稚園児の入学レディネスに関連しているかもしれない。

(2) 性差

漢字の読み、書き、語彙、しりとりおよび英語のアルファベット認知の平均得点のいずれにおいても、男児と女児の間に有意な差はみられなかった。読みと英語のアルファベット認知について、男児のほうは女児よりもやや有意に高いが、他の能力においては女児のほうの平均得点が男児より高かった。中国では「男女平等」が提唱されてからすでに60年あまりが経ち、都市部では子どもの性別を問わずきちんと教育を受けさせることは当たり前になっている。教育機会平等という社会的な要因以外に、女児が男児に比べて得点が高い理由として、女子のほうがおとなしく指示に従い、勉強するときもより集中力が高いなど他にも考え

られる原因はいくつかある。

(3) 幼児のリテラシー能力の間の関連

幼児のリテラシー能力の間にどのような関連があるかについて検討した。

まず、漢字の書き得点に関しては、どの年齢においても、書き得点は書き順との間に有意な弱い正の相関がみられた ($r = .368^{**}, .221^{**}, .218^{**}$)。

5歳児を除いて、3歳児と4歳児は書き得点と確認回数も正の相関が認められた。また、4歳児を除いて、3歳児と5歳児では書き得点、書き順と言語補助、確認回数との間に正相関が確認された。さらに、3つの年齢において、いずれも書き得点は読み得点、しりとり得点との間に有意な正相関があった。

また、3、4歳児グループにおいて書き得点と読み得点の間に強い正の相関がみられたが、5歳児の場合、読み得点と語彙得点の間に正の強い相関があった。

2. 経済格差による保護者の育児行動としつけスタイルの差異

今回の調査のもう一つの目的は、経済の格差が「中国ママ」(教育に対して極めて熱心である中国の母親のことを意味している。最近流行語となっている)のしつけスタイルにどのような影響を与えているのかを解明することで、その結果は以下の通りである。

(1) 子どもを習い事／塾(「興味班」)に通わせることの比較

低所得層と高所得層の間に有意な差がみられ、低所得層の保護者は子どもをより多く(1つか2つ)の習い事、特に外国語系の塾に通わせることがわかった。就学前準備のために子どもを塾に通わせる低所得層の保護者は高所得層保護者の倍となった。この結果から、低所得層の保護者は高所得層の保護者よりも子どもに外国語を習わせる熱意がより強いことが窺える。

(2) 教育投資額と文字を教えることの方針に関する比較

低所得層の保護者に比べて、高所得層の保護者は子どもに絵本、物語、漫画、学習雑誌、図鑑の5つの教育に関する書物を買わせる数はより多かった。また高所得層保護者は子どもに文字を教えるための考え方として、「文字の豊かな環境におく」「子どもが興味があるときに教える」という項目の選択率も低所得層より有意に多かった。所得の高い家庭は経済的にゆとりがあるため、より多くの書籍を購入することが可能であり、低所得の家庭の子どもに比べ、高所得の家庭の子どもはより文字の豊かな環境にいられることが推測できる。

(3) 保護者のしつけスタイルの比較

保護者のしつけスタイルについて因子分析を行った結果、「共有調和」「厳格」と「子ども中心」

という3因子を抽出した。因子得点により群分けした結果、「共有調和型」「共有厳格型」と「疎遠無視型」という3つのグループとなった。「共有調和型」は親子間では感情の共有ができ、協和的な関係を持っていることを指す。「共有厳格型」は、「共有調和」と「厳格」の得点とともに高く、即ち、子どもと感情の共有ができる一方、子どもを厳しくしつけるタイプのことを指す。「疎遠無視型」は3つの因子得点がすべて低く、親と子どもとの間に距離があり、子どもに対して関心が薄いタイプである。

3. 経済格差が幼児のリテラシー得点に及ぼす影響

今回の調査を通して、保護者の所得の差は幼児のリテラシーに影響を及ぼすことが明らかにされた。表2-4に示されたように、高所得層の子どものリテラシー得点は有意に高かった。子どものリテラシー得点は教育投資額、保護者のしつけスタイルと強い相関がみられた。すなわち、親の教育投資額が多ければ多いほど、幼児のリテラシー得点が高いという傾向があった。幼児のリテラシー得点は保護者のしつけスタイルの「共有調和型」「共有厳格型」「疎遠無視型」の順で低くなっている。

表1 保護者の所得としつけタイプの比較

所得	n	共有調和(%)	共有厳格(%)	疎遠無視(%)
高い群	458	63%***	29%	8%
低い群	507	23%*	66%***	11%

表1で示されたように、高所得群には「共有調和型」の比率が最も高く、対照的に、「共有厳格型」において、低所得群の保護者が占める比率が有意に多かった。両群においてどちらも「疎遠無視型」が少なかった。

表2 教育資料（書籍）の投与と幼児のリテラシー能力との相関

	絵本			物語			漫画			稽古			図鑑		
	3歳	4歳	5歳	3歳	4歳	5歳	3歳	4歳	5歳	3歳	4歳	5歳	3歳	4歳	5歳
読み得点	.144*	.166*	0.052	.229**	0.086	.156*	-.001	-.008	-.0008	0.114	0.129	0.051	0.098	0.071	0.084
書き得点	.175**	0.021	0.044	.139*	0.035	.156*	0.021	0.026	0.022	0.072	0.084	0.023	0.05	0.039	0.06
語彙得点	.295*	0.132	0.198	.280*	0.221	0.384	-.012	0.25	0.333	0.198	0.181	0.159	.274*	0.145	-.0134

表3 親のしつけのタイプにおける幼児のリテラシー能力の差の検証

しつけタイプ	読み得点			書き得点		
	n	Mean	SD	n	Mean	SD
共有調和型	371	38.88***	35.75	396	7.26*	2.80
共有厳格型	159	37.77	35.70	161	7.02	3.03
疎遠無視型	290	34.39	35.73	311	6.88	2.71

表4 親の教育投資額における幼児のリテラシー能力の差の検証

教育投資額レベル	書き得点			英語得点			読み得点		
	n	Mean	SD	n	Mean	SD	n	Mean	SD
レベル1	235	6.86	2.73	235	5.03	8.20	235	31.36	34.24
レベル2	293	6.97	2.79	293	6.7	9.72	293	33.92	34.62
レベル3	214	7.21	2.85	214	10.25**	11.42	214	46.05***	36.58
レベル4	44	7.36	3.07	44	13.05***	13.85	44	46.59***	39.39

※(レベル1：<300元/月；レベル2：300～600元/月；レベル3：600～1200元/月；レベル4：>1200元/月)

※ *** p<.001, ** p<.01, * p<.05

考察

幼児のリテラシー発達は発達的な要因によって、年齢が上がるに伴い上昇していく傾向が見られたが、保護者のしつけスタイルや教育投資額など社会的な要因もリテラシー得点に影響を与えて

資料

いて、所得の差が大きく作用していることが明らかになった。

我々は所得の差を埋めることはできないが、今回の調査を通して、心に余裕をもって、子どもとよりよい親子関係を築き、よりよい学習環境を作

ることは、子どもの読み書きに関する興味を引き起こすことにプラスに働くという結果を保護者たちに理解してもらうことは意味があるだろう。

質疑応答

一見 国立教育政策研究所の一見

と申します。周先生のご報告によれば、幼児のリテラシーの発達の点で、中国ではあまり性差が出なかったという事です。その理由についてお考えをおうかがいしたい。

榎原 それでは周先生。

周 なぜ男女差がないのかというと、多分男女平等ということが提唱されて60年も経たからだろうと思います。また、今回の調査の対象は上海であり、上海は中国において最も進んでいる都市ですから、女兒は男児ほど勉強しなくてもいいという考えをもっている親は少ないだろうと推測しております。

ただ、読むことと英語のアルファベットと語彙の3つは男児の方が女兒よりちょっと高い、けれども、女兒の方は書くことがちょっと高かったです。

榎原 内田先生、補足することは。

内田 細かく見ていくと中国でも性差が出ています。特に内因、成熟の要因による立ち居振る舞いには性差が表れる。しかし、5歳になると、それがなくなり、追いついてくる。

これは3カ国共通です。

もうひとつは、テストの形式が性差を引き出しやすいということもあります。言語知性を反映しやすいテストになると、どうしても女兒の点数が高くなる傾向があります。すなわち、使用したテストの形式と、成熟の要因と双方が絡んで性差が生じるのだと考えられます。

榎原 どうぞ、他の質問お願いします。

相良 西九州大学の相良と申します。

周 周先生にご質問です。興味班ですね、これが低所得の家庭で行なわれていて、高所得の家庭では行なわれない。日本人の感覚と逆だなという気がするのですが、その背景をうかがいたいと思います。

榎原 周先生、どうぞでしょう。

周 まず一つの背景は経済能力。高所得の家庭は、外部の塾など

を活用していて、興味班を利用しないのかもしれない。

もう一つの問題は親たちの考え方。高学歴の親ほど子どもにもっと遊ばせたい、もっと自由に成長してほしいと考えているのではないかと。他の調査ではそのようなデータが出ています。一方、低所得の親たちはもっと子どもに早くいろいろな知識をマスターしてほしいという考え方があり、多分この2つのことが絡んでいて、日本と逆転した現象が出ているかもしれません。

榎原 ありがとうございます。私から、李先生にご質問したいのですが、所得と言語能力の関係というのは日本と韓国で似たような結果になっているのですが、所得と教育投資額は明らかな相関があるのでしょうか。先生のお考えをちょっとお聞かせ願いたいと思います。

李 所得と教育投資額と関連があるかということですが、韓国でも中国同様に所得は低いのに親が犠牲になり、教育投資額を増やすという傾向もみられます。所得と教育投資額を単純にイコールとみることはできないと思います。

榎原 ありがとうございます。

周 どうぞ、李先生。

朱 今回の共同研究は、子どもたちのリテラシー、特に読むことと書くことに重点を置いた研究だと理解をいたします。では、読む能力や書く能力、これは一体、人間が子どもとして発展していく過程で身につけていくようなものなのか、それとも外部から子どもたちに何らかの教育をする結果としてたらされるものなのか。議論の前提として、それが実はあまりはつきりしていないと思います。

もちろん家庭の所得水準やあるいは親の学歴、あるいは教養面は、ある意味ではとても重要な要素だとは思いますが、私としては、むしろこの3カ国に共通する文化的な要因や、特に保護者が子どもの読み書き

の能力に対してどれだけ注目をして
いるか、あるいは文化的背景のもと
で知らず知らずのうちに子どもたち
に与えられている影響、そういうも
のがもしかしたら大きいのでは
ないかと思っています。

この調査は始めたばかりですが、
さらに突っ込んでいくと、とても影
響力のあるいい調査になると思いま
す。例えば、似たところの多い3カ
国であります、この3カ国の文化
的な違いは何なのか。また、意識と
か認識の完全には違うところがどこ
にあるのか。そういうことを踏まえ
た上で、同じような調査が継続でき
れば大変すばらしいと思います。

内田 朱先生には、非常に大事な
ことをおっしゃっていただきましたし
た。読み書き能力というのは、これ
は発達していく過程で起こってくる
もののなか、それとも、それ以外の
環境要因の影響なのかということな
のですが、やはりこれは両方の要因
がきているのだと思います。

しかも、環境要因はあまり意識的
にしつらえたものではないにもかか
わらず、私たちの文化が読み書きを

手に入れたことによって、それがい
ろいろな環境場面にちりばめられて
いる。例えば、母親が新聞を読んだ
り、父親が読書をしている姿を見て
いると、そのようなものがカリキュ
ラムとして子どもの中に内面化して
いく。

それともう一つはもっと大きな文
化の価値。例えば、読み書きそろば
んというのは3カ国ではすごく大事
にされてきました。そのような文化
の価値みたいなものが子どもの生活
の中に入っていくことになるのだろ
うと思います。

それから、これはもうすでにデー
タがあるのですが、読み書きに価値
を置かない親のもとで育った子ども
たちがどうなるのかというと、小学
校の1年生の9月で他の子どもたち
に追いついてしまいます。何が違う
かといいますと、読み書きに触れる
のが遅かった子どもの方が、文字の
読み書き機能についてはつきりと意
識していく。つまり、文字って便
利、書けるっていいことだと、時間
空間を隔てた相手とのコミュニケーションの価値ある道具であると認識

する。そういう意識は後発の子ども
ほど高い。これは1989年に私が
追跡した研究の中でもはっきりして
おります。

朱 この研究とは別に、私は韓
国の親たちにインタビューしたこと
があります。そこで驚くような結果
を得ました。親たちは早期読み書き
を機械的に導入するというのは、子
どもたちにとって有効な教育ではな
く、子どもたち一人ひとりにきちん
と対応していくほうが大切であるこ
とをよくご存じでした。

それなのに、なぜ子どもたちにさ
かんに早期教育を施そうとするの
か。いま親たちは育児に対して、自
分の子どもの将来について、とても
不安を抱えています。うちの子だけ
落ちこぼれるのではないかと気が気
ではありません。日本、中国、韓国、
3つの国とも、少子化の時代になっ
ており、自分の子どもは宝物という
意識があるので、ますますそういう
不安にかられてしまいます。そのこ
とが早期教育ブームへとつながって
いるのだと思います。

ですので、このような親たちを安

心させるためにも、明確な証拠が必
要です。このように大規模な比較研
究を通して、小学校に入学する前に
ドリルで学習した子どもたちが小学
校に入学してから読み書き能力とい
うものを維持できるのかということ
について明確な証拠を親たちに示さ
なければなりません。

もっともっと早期教育をというの
ではなく、子どもの絵本読みとか読
書を通して、どのような観点に立つ
て、どのように子どもに目線を合わ
せて、子どもの発達を考えるべきな
のか。親への提言のところに目を向
けなければなりません。これは3カ
国共通に示唆されるべきことである
ということをつけ加えたいと思いま
す。



2

第2章

情動の子ども学

(2009年11月2・3日 中国・上海にて)

■主催…チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)、華東師範大学
■共催…(株)ベネッセコーポレーション、ベネッセ次世代育成研究所



①	脳の三位一体学説から情動の役割を考える
②	中国における幼児メンタルヘルス教育の実践と研究
③	人を引き込む身体的コミュニケーション技術
④	所有に関する行動の日中文化比較
⑤	ベビーマッサージとアタッチメントについての研究
⑥	親の期待と幼児の発達について
⑦	教育的視野の中の子どもの遊戯
⑧	赤ちゃんはヒトに興味をもつ

何故人間は心をもったのだろうか、

脳の三位一体学説から情動の役割を考える

小林 登

Kobayashi Noboru

東京大学名誉教授・CRN所長

この会のテーマである「情動の子ども学」の基盤として、「人間はどうして心を進化させて、現在のように豊かな心をもったか」について、私見を述べる。

まず、人間の特徴を図①に整理した。1)の「背を下にして寝る」は、京都大学霊長類研究所の松沢哲郎先生が最近、特徴として挙げられたものである。特徴の2)、3)、さらに4)は、文化・文明に関係すると言える。5)の「大きな脳」は、当然のことながら、1)～4)の全てに関係する。

考えてみると、文化・文明をもつことは、音楽・絵画のような芸術を作り出し、鑑賞し、感激し、感動する優しい心のプログラムをも

つことを示す。しかし同時に、不安を感じ、怒り、そして攻撃する心のプログラムをもっていることも、世界のあちこちの戦争を見れば明らかである。雄としての座を勝ち取るため、チンパンジーはグループ同士で残酷な争いをするが、人間は科学・技術を駆使してまで戦争をする事実を考え、6)に人間の特徴として挙げた。

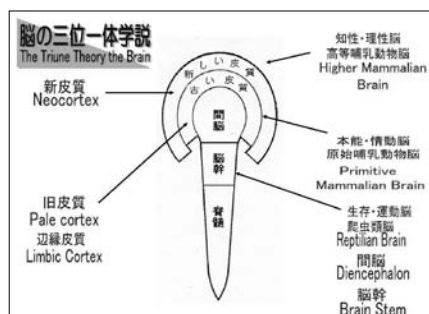
科学者である。彼は、進化の結果、図2のように脳は三位一体の構造になったと考え、大脳辺縁系にあたる「古い脳」の果たす機能(Paleocerebral Function)が重要であると述べている。

脳進化は、脊椎動物で始まり、3～5億年前の魚や爬虫類の祖先の生命を維持する呼吸・循環や手足を動かす体のプログラムだけの「生存・運動脳」と呼べる脳ができた。その体のプログラムの働きを良くして、生存競争に勝ち、たくましく生きるため、本能とか情動の心のプログラムをもった「古い皮質」、すなわち大脳辺縁系が「生存・運動脳」をカバーして、「本能・情動脳」になったのであ

人間のもつ特徴とは Specific Features of Human Being

- 1) 直立二足歩行・背を下にして寝る
- 2) 道具の製作・使用／文化・文明
- 3) 音声言語コミュニケーション／文化・文明
- 4) 家族の形成
- 5) 大きな脳
- 6) 戦争

図①



図②

る。7000万年前に現れたカンガルーやコアラの祖先である原始哺乳動物の脳がそれである。

本能の心のプログラムのうち、「食欲」の心のプログラムは体をつくるため、「性欲」は子孫を殖やすために、夫々の体のプログラムの働きを強化した。情動の心のプログラムのうち、喜びなどの心のプログラムは、仲間を作り、さらに進化してからは家庭や社会を営むのに重要であり、それによって厳しい自然を生き残ったのである。怒りとか、恐れとか、攻撃などの心のプログラムは、食料にする大型動

物のハンティングに、さらに歴史の中で国や領土ができてからは、戦いにとって重要な心のプログラムだったと言える。

5000万年前に現れた高等哺乳動物の祖先になると、知性・理性の心のプログラムをもつ「新しい皮質」が「本能・情動脳」をカバーして「知性・理性脳」に進化した。知性・理性の心のプログラムで、それまでに進化した心と体のプログラムを上手く良く働かせて、環境に適応し、他の動物との関係も考えて生活できるようになったのである。さらに脳進化は続き、2〜3000万年前に霊長類が現れ、1400万年前のラマピ

テクスから人間進化の道をたどった。

その結果、われわれの脳は三層構造になり、前頭葉には人間になる心のプログラムを進化させ、三つの脳をお互いに相互作用させて、文化・文明の中でも生活できる人間の脳になった、と考えるのがMacleanの「脳の三位一体

学説（又は仮説）」である。

われわれとDNAが99%同じ霊長類のチンパンジーは、共通祖先から500万年〜700万年前に分かれたと考えられる。1%のDNAの違いが、わずか600万年程の間に、猿人、原人、旧人、新人、そして現代人へと進化させたのである。

さらに200万年前、われわれの共通祖先は、現在のチンパンジーとボノボのそれぞれの祖先に分かれたと考えられている。大変面白いことに、チンパンジーの方はオス優位の社会で、オスが自分の立場を確立する際に凶暴な争いさえするのに対し、ボノボの方はメス優位の社会で、優しいさといった生活をしている。しかし、人間はこういった分かれ方をせず、今も二つの情動の心のプログラムをもって生きていると言える。

人間が最も進化した知性・理性の心のプログラムをもつ脳をもったとしても、前述の通り、体のプログラムをよく働かせるために、心のプログラムが進化し、三層構造になったという事実は重要である。特に、原始哺乳動物の「本能・情動脳」の古い皮質にある本能

とか情動の心のプログラムは、体のプログラムの働きを良くするばかりでなく、それを基盤に進化した知性・理性の心のプログラムを働かせるのにも、重要な役を果たしていると言える。

1400万年前に現れたラマピテクスは、500万から700万年前にチンパンジーの祖先と分かれ、人間進化の道を取り、350万年前にアウストラロピテクス、200万年前に直立猿人に進化した。そして、80万年前には原人になり、直立歩行、火や石器を使い、言葉もしゃべり始めたと考えられている。そして、10万年前に旧人のネアンデルタール人、4万年前に新人のクロマニヨン人となり、文化を芽生えさせたのである。

ネアンデルタール人は、クロマニヨンより前頭葉は未発達で、言語能力は未熟と考えられるが、心は発達していたようで、死者を弔い、花をたむけるような優しい心ももっていたと考えられる。クロマニヨン人は、言葉を使い、集団生活をし、狩猟・採集を行い、洞窟絵画を残し、宗教的な営みも行っ心をもち、現代人に進化した。

このように進化した我々の現在の「知性・理性脳」では、大脳新皮質、特に前頭葉（前頭連合野、前頭前野）が著しく発達し、思考・学習・調査・推論・注意・意欲・創造・人格・性格（感情・自己顕示欲などのコントロール）など、人間を人間として特徴づける心のプログラムをもったのである。

この進化の流れは、胎児・新生児の早期行動にみられる心のプログラムの働きをみても明らかである。テレビを見ながらお母さんが聞いている音楽に対して、妊娠12週の胎児は心拍数の変化を示す。音楽を理解する心のプログラムは、早期から働いているのである。妊娠後期の胎児でも微笑むことが超音波画像で見られるが、生まれて間もない新生児でも、産湯に浸かったりするとニンマリするので当然である。また、お母さんが優しく語りかけると乳児が笑うことは、日常に目にするのである。

これらのことから言えるのは、「嬉しい」という心のプログラムも、人類進化の中で獲得した基本的なものということである。胎児の時は「気持ち良い」、すなわち快・不快の「快」

によって、顔に微笑む表情が出る。乳児になると、知性・理性の心のプログラムも加わった「嬉しい」、「楽しい」などの複雑なプログラムになっていて、お母さんの声とか表情の「情報」で、スイッチが入って微笑み、笑うことになる。小学生になれば漫画で笑う、高校生になれば落語で笑うといったように、心が発達するにつれて、知性・理性の心のプログラムと組み合わせられた、より複雑なプログラムで笑うのである。

心の発達とは、進化の過程で獲得した、生まれながらに持っている基本的な心のプログラムを働かせながら、他の色々な心のプログラムと組み合わせ、複雑なプログラムを作ることと言える。それには、大脳辺縁系中心の古い脳の情動の心のプログラムが大きな役割を果たすのである。

脳進化を基盤とする「脳の三位一体学説」から心と体のプログラムの関係を考えることは、「子ども学」の大きな柱である。それを示す、イギリスの栄養学者・ウィドウソンによる、第二次世界大戦直後のドイツの孤児院で観察した子どもの体重の変化についての重

要な報告がある。

第二次世界大戦後、ドイツのある町に二つの孤児院（A、B）があり、Aは若い優しい女性が、Bはうるさい老女が子どもたちの世話をしていた。Aの子どもの方が、Bの子どもより体重増加が良かった。Bの中にも少し体重増加が良い子がいたが、それは、老女の

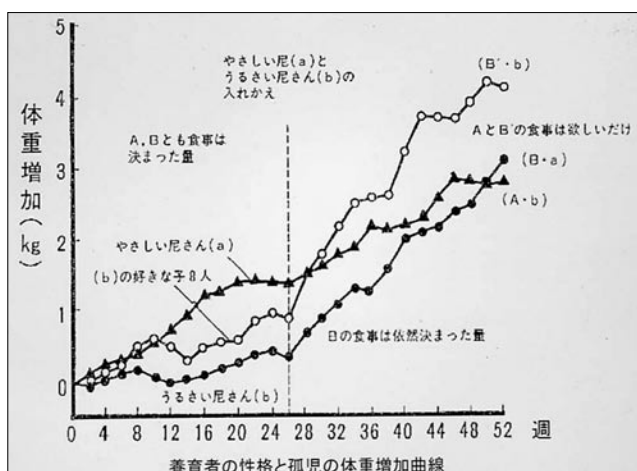


図3

好きな子どもたちだった。ある時、Aの優しい女性が辞めたので、Bの老女を、体重増加の良い子どもも連れてAに移し、一緒に世話をさせ、その上食事の量も少し増やした。Bには体重増加の悪い子ばかりが残ったが、食事の量を増やすことなく、Aにいたような優しい女性に世話をさせたとこ、体重増加が

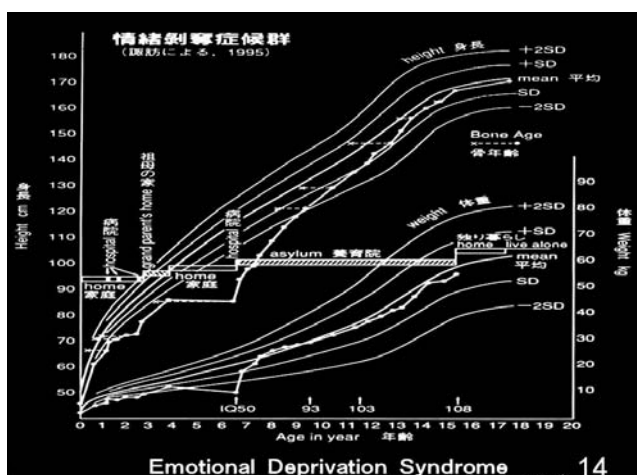


図4

逆転した。——図3 世話する人の優しさが、子どもの体の成長に影響することを示した研究である。体重は色々な体の機能をまとめた統合的な表われで、このデータは、世話する人の優しい心によって、子どもの心のプログラムの働きが良くなり、成長に必要な体のプログラムの働きも良くなることを示している。

図4は、諏訪が1995年に報告した“emotional deprivation syndrome”、すなわち母親がわが子を可愛がらない、ちゃんと世話をしない、今の「子ども虐待」の中の「ネグレクト」にあたる事例である。図の上が身長曲線、下が体重曲線で、身長が1センチも伸びず、体重は減少している4～6歳の時は、母親と一緒に生活している時、その前の体重増加が良い時は、祖母が優しく世話をしていた時であり、6歳を過ぎて養育施設に移され、優しい職員に世話をされると、身長も体重も急速に改善し、正常になったのである。これも、「優しさ」という感性の情報が、体のプログラムの働きを強化して、成長を良くすることを示している。この、成長が止まった時、

重度栄養失調児に見られた 反復感染の頻度と死亡率

	反復感染 (頻度/月)	死亡率 (%)
一般小児病院	4.5±0.2	2.9
リカバリー・センター	0.3±0.6	0

[F.Monkeberg, 1989]

図5

成長ホルモンの分泌検査をすると、分泌はほとんどなく、入院45日目で少し、70日目ですぐと上がり、施設に入って3年後に正常に戻ったのである。心のプログラムが、体のプログラムのひとつである成長ホルモン分泌のプログラムを抑制することを示している。

図5は、1989年パリの国際小児科学会で、南米の小児科医モンケベルグによって報告された、重症栄養失調の合併症である感染症についての発表である。一般小児病院で

は、適切な食事療法ばかりでなく、薬を使う一般的な治療法を行った。モンケベルグのリカバリー・センターでは、それだけでなく優しい女性に世話をさせたのである。その結果、反復感染の頻度は1/15に減少し、死亡率は2.9%から0になった。これは、免疫機能という体のプログラムも、優しさによって働かなくなることを示している。

まとめると、心の進化は、おそらく原始哺乳動物の脳辺縁系にある「快」、「不快」の心のプログラムから始まって、高等哺乳動物になり「知性」、「理性」の心のプログラムが加わり、人間に進化して、豊かになったと言える。「快」から出発したポジティブな情動として、喜び、楽しみ、愛、笑いなどの心のプログラム、「不快」から出発したネガティブな情動としては、怒り、不安、憎しみ、悲しみ、泣き、さらには攻撃などの心のプログラムが考えられる。喜びなどの情動の心のプログラムは、人間関係の維持、身体機能の活性化、心の発達の促進、IQの上昇、良い性格の形成に関係する。一方、怒りなどの情動の心のプログラムは、身体機能や精神機能を

強化し、生存競争に勝つことができるが、程度と質によって、心の発達に障害が起こることも考えられる。

したがって、私が申し上げたいのは、「子どもの生活の場を喜び一杯にすることが、子どもの成長・発達にとって重要である」ということである。そのため、学校や家庭では、子どもの立場に立って、全ての「モノ」や「コト」を「チャイルドケアリング・デザイン」(Child-caring design)しなければならぬ。もちろん、子どもを社会生活ができるよう、立派な大人にするには、教えるべきことも沢山あり、「しつけ」も必要である。しかし、厳しく叱る時にも、関係する大人は誰もが、心の中に子どもに対する優しい心をもたなければならぬ。

このように、情動の重要性を考えると、「子ども学」の中に"Child Bio-emoinenics"「子ども生命感動(情動)学」という柱をたて、子どもたちを「生きる喜び一杯」にする理論と実践の研究が必要なのである。

① 脳の三位一体学説から
情動の役割を考える

② 中国における幼児
メンタルヘルス教育の
実践と研究

③ 人を引き込む
身体的コミュニケーション
シジョン技術

④ 所有に関する
行動の日中文化比較

⑤ ベビーマッサージと
アタッチメントに
ついての研究

⑥ 親の期待と幼児の
発達について

⑦ 教育的視野の中の
子どもの遊戯

⑧ 赤ちゃんはヒトに
興味をもつ

中国における幼児メンタルヘルス教育の実践と研究

―「ジッピーと仲間たち」in 上海

朱 家雄

Zhu Jiaxiong

華東師範大学教授

◎「ジッピーと仲間たち」の導入と展開

上海市は、中国国内で「ジッピーと仲間たち (Zippy's Friends)」のメンタルヘルス教育プログラムを初めて導入した都市である。このプログラムは、「子どもの友」(CHILDREN PARTNER) から発展したもので、HSBC (香港上海銀行) の支援を受け、華東師範大学学前教育研究所と香港教育学院が実施した。3年間で上海市内4地区の150箇所の幼稚園で実施され、300名近い教師が研修を受け、参加した子どもは12000人余りに上った。今後2年間で、400余りの幼稚園で実施される予定で、800名の教師が研修を受け、参加する子どもは約40000人に達する見込みである。

◎「ジッピーと仲間たち」の紹介

「ジッピーと仲間たち」は、子どもに感情の処理方法やコミュニケーション方法を学習させるプログラムで、現在、すでにブラジル・カナダ・デンマーク・イギリス・中国・アイスランド・インド・リトアニア・アメリカ・ノルウェー・ポーランドなど16カ国で実施されており、それぞれ成功している。

「ジッピーと仲間たち」は、困難に直面した際の問題解決方法を教えることによって、子どもたちが大人になった時により良い問題解決ができるだろうという理念のもと、行われている。精神面の健康とコミュニケーション能力の発達は、子どもの一生を左右するもので、子どものメンタルヘルスの鍵である。「対処」、すなわち異なる状況を処理する手助け・支援をすることである。

情動の理論「認知的評価」の

代表的人物リチャード・ラザルス (Richard Lazarus) は、「対処」

とは、「困難に直面したとき、自分自身を越える資源（問題解決の方法と能力）が必要になるため、認知と行動の転換をせまられるもの」と考える。「ジッピーと仲間たち」の中の「対処」の設計は、子どもが苦境に立ったとき、自分の行動をどう変えたり、改善すればよいか、例えば友達の援助や助言を求めたり、新たなことに気持ち向けたり、人間関係を改善するほか、積極的に争い事や問題を解決していく子どもの行動に焦点を当てている。また、このプログラムは、特に5〜7歳の子どもを対象に設計されている。——図①

●「ジッピーと仲間たち」の特徴

さて、「ジッピーと仲間たち」は、これまでの類似プログラムとどんな点が違うのだろうか。以下に3つ挙げてみよう。

1. 全ての子どもを対象に、その情緒・感情と社会的コミュニケーション能力を引き上げるものであり、問題のある子どもだけを対象としているものではない。

ジッピーと友達

—幼児のための情緒教育

目的は幼児を励ますこと

- 日常的な問題を処理するスキルを学ぶ
- 様々な問題を解決する能力を発展させる
- 感情を識別・表現する能力を養う
- プラス志向
- 自分で考える
- クラスの一員として協力して仕事をする

図①

2. 子どもに「これは正しくて、これは間違っている」という教え方は決してしない。先生も子どもに具体的な問題解決の方法を教えず、その代わりに、子どもが積極的に解決の方法や道のりを話せるように仕向け、その方法が適当かどうかを一緒に話し合う。

3. 子どもを競争に駆り立てるものでもなく、みんなで一緒に協力して助け合うものである。子どもは自分たちの態度によって評価されたりはせず、クラスの中には最高点もないし、最低点もないのである。

「ジッピーと仲間たち」は、教育機関のカリキュラムを適用している。一般には24週が必要で、毎週1章行う。6つのストーリーで1シリーズが構成されている。ジッピーは一匹のナナフシで、彼の仲間はずもたちである。ストーリーは、子どもにとってはなじみの深い問題——友情・交流・孤独・屈辱・変化・喪失に直面したこと・新しい始まりなどである。どのストーリーにもカラーのイラストがあり、24章は6つの単元に分かれ、各単元に独立テーマがある。例えば、第1単元は、「感情」で、悲しさと嬉しさ・怒りと悩み・嫉妬・緊張の4節から構成されている。第2〜第6単元は、それぞれ「意志疎通」・「建設と破壊の関係」・「衝突をなくす」・「変化と喪失に対応する」・「新しい環境に対応する」である。——図② 単元ごとに独立した一冊となっており、ストーリーと単元目標や指導の流れなどが入っている。その他、付属の写真と『ジッピーと仲間たち』教師用引きがある。授業の始めに先生がストーリーを話した後、子どもたちは、絵画や討論、遊戯といった各種の活動に参加する。活動の目的は、子どもが自分の感情と行動を自覚し、理解する手助けをすることである。——図③

カリキュラムの三大分野

第一分野：（単元一、二）

感情を理解する

第二分野：（単元三、四）

友情を築く

第三分野：（単元五、六）

変化に適応する

図②

カリキュラムの目標

➤子どもが日常生活で出会う問題や状況にどう対処するかを学ぶことをサポートする

➤自分と他者の気持ちを理解し、自分の感情の表現方法、感情をコントロールすることを学ぶ

➤他者との協力関係を築き、他者を助ける能力・他者の助けを求める能力を学ぶ

図③

●「ジッピーと仲間たち」の実施にあたって

「ジッピーと仲間たち」プログラムの実施過程では、教師の役割はとても重要である。教師はまず、プログラムの研修を受けて、ここに貫かれている哲学や基礎理論・対処の概念・プログラムの構成・活動を支える理論等を理解しなければならぬ。教師はプログラムの6つの単元を熟知し、さまざまな活動を展開する。そして保護者と連携しながら、子どもが現実に対面している色々な問題を共同で解決する。

「ジッピーと仲間たち」は、教育機関におけるプログラムではあるが、決して保護者と無関係ではない。保護者は教育機関の各活動を展開していくための良きパートナーであり、教育は、学校と保護者と社会の共同責任で行うものである。保護者は子どもの学業成績だけに関

心をもつのではなく、子どものメンタルヘルスに、より関心を寄せるべきである。保護者が先生を支持し協力して一緒にプログラムを実行し、子どもと一緒に遊びに参加することで、このプログラムの効果をより高めることができる。

図④・⑤



保護者は教師と手紙やお話を通して頻繁に交流します。

図④



保護者は教師と一緒に Zippyの教材を設置

図⑤

●「ジッピーと仲間たち」プログラムの効果研究

プログラムの実施過程において、我々は実施の有効性について「量的」および「質的」な面での研究を行った。

(1) 量的研究

感情認知教育または感情表現教育という面から、「ジッピーと仲間たち」プログラム実施前後の評価のデータを見ると、感情認知にお

いて、悲しみと怒りは子どもにとって大変識別しやすいが、嫉妬ややましさなどの感情は最も識別しにくく、悩みや緊張の識別はその中間くらいであることがわかる。プログラムの実施前に各項目の感情認知状況の比較をしたところ、幼児の感情表現の意志と能力は明らかに低かったが、実施後では、幼児が他者に感情を訴えようとする意志と能力は両方とも強化されていた。ただし、感情表現の仕方などは、依然として感情認知の状況と完全に対等にはなっていないかった。この研究結果から、メンタルヘルス教育の過程では、幼児に対して感情認知上の教育を施しているだけでは十分ではなく、感情表現面での教育内容を配する必要があるとわかった。つまり、子どもが、適当な訴えや意志疎通を通して、自己のマイナス感情を発散させるよう励ますことである。研究のデータによると、プログラム実施前、多くの幼児は「機嫌が悪いときどう対処すればいいか」が全然わからなかったが、実施後では、「わかった」か、「完全にわかった」という幼児が明らかに増えていた。このことはまた、幼児は自分で機嫌を直す方法とテクニクを身につけられるのだということも示している。したがって、メンタルヘルス教育では、幼児が日常によくある機嫌の悪さの対処法を身につける手助けをすることも可能である。

この他、社会的コミュニケーション能力の発達とその他の対処能力の発達などの面でも、プログラム実施前後で、子どもの行動に明らかに変化と改善が見られることが研究データによって示されている。

(2) 質的研究

プログラム実施過程で、我々は、多くの幼児と幼稚園教師および保

護者自身の実体験の「エピソード」を集めた。これらのエピソードは、我々に「ジッピーと仲間たち」プログラムが幼児のメンタルヘルスをどのように増進させ、保護していけばよいかを具体的に示すほか、実は幼児も、とても多くの問題や衝突に直面しており、メンタルヘルス教育を通して、問題や衝突に対処する能力を高めることが必要であることを示している。これらのエピソードは、インターネットの「ジッピーと仲間たち」サイトでの教師同士や教師と保護者、および保護者同士の交流が、このプログラムをより効果的に運用するための重要な役割を果たしていることを示唆している。

●メンタルヘルス教育の重要性

現在、多くの教師や保護者は、幼児のメンタルヘルスの重要性への認識はもっているが、心の障害や問題を予防するといった面に関心が留まっている。幼児段階で深刻な問題行動や心の問題が明らかになる子どもの割合は、さすがに大きくはない。そのため、幼児のメンタルヘルス教育が重要だと考えてはいても、他分野の教育と比べて、それほど重要な教育分野であるとは認識しないままである。だが、本研究の質的分析からは、「ジッピーと仲間たち」プログラムの効果は幼児のメンタルヘルス分野だけに留まらず、実際に広く幼児の幼稚園における各活動に行き渡り、教師が教育・教授活動を進める上でも効果があることが明らかになった。こうした輻射効果は、他の分野の教育では達成されにくいものだ。この意味では、幼児のメンタルヘルス

教育は、決して幼児教育の補助的部分ではなく、鍵となる部分であると言える。また、感情教育プログラムは、他のカリキュラムの教育内容を補助するものでは決してなく、他のカリキュラムに加えて行うといった教師に余分な負担をかけるものでもない。もし、感情教育プログラムが合理的に設計されて有効に実施することができれば、感情教育は、教育全体の核心部分になるはずであり、その効果は他の分野の教育にも浸透し、それらを助けるものになるだろう^[1]。感情は、メンタルヘルス状態の大事な要素であり、感情教育が全体のカリキュラムへ与える影響は、実はメンタルヘルス教育が教育全体に与える影響と言ってもよいものだ。つまり、幼児のメンタルヘルス教育も、幼児教育の鍵となり、他の教育分野と同様に重要であると考えてよいだろう。

●「ジッピーと仲間たち」の評価

プログラムの効果によってさらに明らかになったことがある。この「ジッピーと仲間たち」プログラムの実施前には、教師も保護者もプログラムの必要性にかすかな疑念を抱いていたということである。しかし、実施後、その効果が現れて子どもが変化したことにより、教師と保護者は、幼児のメンタルヘルス教育の重要性を充分に実感した。教育研究者や教育政策制定者はみな幼児のメンタルヘルスの重要性を強調するが、教師の助けとなる実践的な手引きは無く、幼児のメンタルヘルス教育を行うにもどこから手をつければいいのかわからず、そ

のため、幼児のメンタルヘルス教育の「効果」と「達成感」を依然として実感できないままであった。保護者も、幼児のメンタルヘルス教育の「効果」と「必要性」を目でみることでできなかったため、幼児のメンタルヘルスの重要性に対して深い知識がなく、興味をもったり、重要視するまでには至らなかった。これもまた、幼児のメンタルヘルス教育が、現在もなお国内で実質的に重視されていない大きな原因である。しかし、「ジッピーと仲間たち」プログラムによって、教師と保護者は幼児のメンタルヘルス教育の重要性に対してすっかり認識を新たにした。「ジッピーと仲間たち」のようなプログラムを直接幼稚園に導入することで、教師と保護者に幼児のメンタルヘルス教育に関心をもってもらい、また十分に重視されるようになった。まさに、「ジッピーと仲間たち」プログラムを実施した教師が語ってくれた次の言葉の通りである。「私たちは、こんなに多く心について言及したことがなく、それはもう関心をもたない訳にはいきませんでした。『ジッピーと仲間たち』プログラムは成果があつて、私もとても達成感を感じ、このプログラムが好きになりました。メンタルヘルス教育に対してもさらに大きな意欲が湧いてきました。以前は、メンタルヘルス教育が重要なことは知っていても、どこから手をつけていいのかわからず、結局行わなかったのです」。

■参考文献

- [1] Tyson, M. (2004). The emotional development of young children: building an emotion-centered curriculum (2nd ed.). New York: Teachers College. P. 22.

① 脳の三位一体学説から
情動の役割を考える

② 中国における幼児
メンタルヘルス教育の
実践と研究

③ 人を引き込む
身体的コミュニケーション
技術

④ 所有に関する
行動の日中文化比較

⑤ ベビーマッサージと
アタッチメントに
ついての研究

⑥ 親の期待と幼児の
発達について

⑦ 教育的視野の中の
子どもの遊戯

⑧ 赤ちゃんはヒトに
興味をもつ

人を引き込む身体的コミュニケーション技術

渡辺富夫

Watanabe Tomio

岡山県立大学教授

●身体的引き込み

人は、単に言葉だけでなく、うなずきや身振り・手振りなどの身体的リズムを共有して、互いに引き込むことで円滑にコミュニケーションしている。この身体的コミュニケーションが一体感を生み、人とのかわりを実感させている。その研究の基盤として、恩師の小林登先生と石井威望先生との共同プロジェクトに大学院生として参加し、まず母子間の原初的インタラクシオンに着目し、母親の語りかけに対して乳児の手足の動きの引き込みを音声・画像解析して、そのメカニズムを人と機械のコミュニケーションに応用し

ようと試みたのが1978年であるから、この身体的コミュニケーションの魅力に取り憑かれて早31年になる。この間、母子間から成人間インタラクシオン・コミュニケーションの引き込みを解析し、うなずきや身振りなどの身体的リズムの引き込みをロボットやCGキャラクター等のメディアに導入することで、対話者相互の身体性が共有でき、一体感が実感できるシステムを研究開発し、身体的コミュニケーション技術を開発してきた[1]。

本稿では、小林登先生に同伴させていたいた中国講演で、うなずきなどの身体的コミュニケーションにおける引き込みの不思議さ・重要性および身体的コミュニケーション

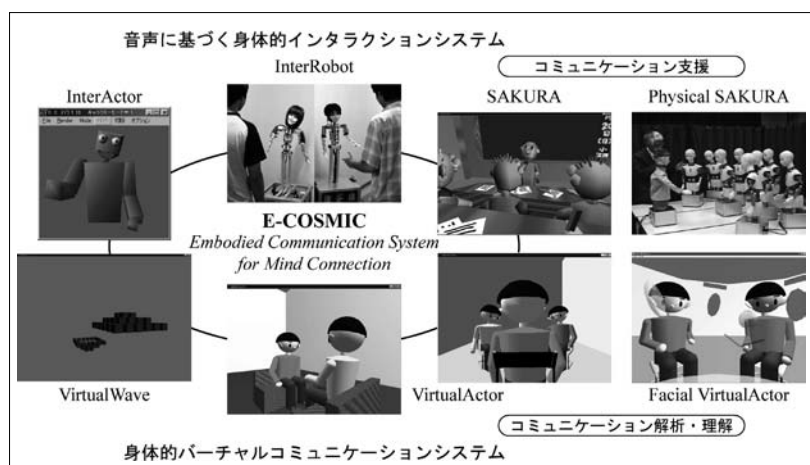
技術を紹介したので報告する。

●心が通う身体的

コミュニケーションシステム

EICOSMIC

EICOSMICのコンセプトを図①に示す。本システムは、コミュニケーションの解析・理解のための身体的バーチャルコミュニケーションシステムとコミュニケーション支援のための音声に基づく身体的インタラクシオンシステムから構成されている。身体的バーチャルコミュニケーションシステムは、自分と相手のアバターであるVirtualActorを



図①心が通う身体的コミュニケーションシステムE-COSMICのコンセプト

仮想のコミュニケーション環境でインタラクションを把握しながらコミュニケーションできるシステムで、VirtualActorの身体動作、韻律情報、それらのタイミングのずれによる

影響など、各種情報を加工して人間のインタラクション・コミュニケーション特性を合成的に解析することができるシステムである。

特に無意識化されている知覚・運動系に矛盾を生起させて顕在化させて、その矛盾が解消されていく過程をコンテキストとの生成と関係づけて調べることで、実環境では実現不可能な仮想環境ならではの解析が行える。

例えば、聞き手のVirtualActorのうなずきなど頭部動作を制御した場合のインタラクション効果を明らかにするなど、インタラクションやコミュニケーションの本質を説明することができる。

一方、音声に基づく身体的インタラクションシステムは、この身体的バーチャルコミュニケーションシステムの解析結果に基づいて、うなずきや身振りなどの身体的リズムの引き込みに着目し、発話音声から話し手および聞き手としてのコミュニケーションの引き込み動作を自動生成するCGキャラクターInterActorあるいは物理メディアのロボットInterRobotを用いたコミュニケーション支援システムである。

InterRobotは、うなずきや身振りなどの身体動作機能をもった電話機のようなもので、InterRobotに話し掛ければうなずきなど身体全体で聞き手として反応し、対話相手の音声が入力された時にはその音声に基づいて話し手として動作することで、InterRobotを介して対話者同士のインタラクションを促進させる。

● 身体的 インタラクションロボット InterRobot

E-COSMICの研究成果として身体的引き込みの重要性和不思議さを実感してもらうために、複数のInterRobotを用いた集団コミュニケーションシステムが日本科学未来館に常設展示されている。—— 図② マイクスタンドを通して語り掛けると、その音声に基づいて1体のInterRobotが話し手として動作し、他の3体のInterRobotが熱心な聞き手として身体全体でうなずき反応する。もう一方のマイクスタンドでの語り掛けには、聞



図② 日本科学未来館でのInterRobotを用いた集団コミュニケーションシステム展示

き手であった3体のInterRobotの内、真ん中の1体が話し手になり、残り3体が聞き手として反応動作する。まさにロボット同士が手振り・身振りとともにうなずき合い、あたかも会話しているような盛り上がり場の形成される。日本語に限らず何語で語り掛けても、適切にうなずいてくれるので、ロボット

を介して会話を楽しむことができる。ロボットは意味がわかって反応しているのではなく、発話音声を時系列解析して身体リズムの引き込み反応をしているだけであるが、このロボットの反応に引き込まれるのは何故なのだろうか。

●引き込み反応で会話ははずむ

InterRobotには人の語り掛けに対して人がどのように動作反応するのか、例えば、うなずき反応は呼吸段落区分での話の区切りを予測していることや、会話中の瞬き反応はうなずき反応と同時に生起することが多いなど、人のうなずき反応やまばたき反応、身体動作反応の仕組みがモデル化されて組み込まれている。また非対面での対話では対面時に比較してうなずき回数も動きも大幅に減少するので、うなずき反応が見えていることが大事である。確かに講義で学生がだらけた反応と熱心にうなずくなどの引き込み反応とでは盛り上がりの場が全く異なり、引き込み反応した場合には教師の主張が通りやすいなど、集団

での引き込み効果を実証している[2]。このようにうなずき反応が見えることが大事なのではあるが、もう一方、たとえ相手が見えなくともうなずきが生起するという事実も重要である。相手が見えないのであるから、自分が話を聞いていることを相手に伝える必要がないにも拘わらず、うなずきなどの引き込み反応を無意識にやっているということである。

このように音声に対する身体的リズムの引き込みが、自分のために無意識にうなずきなどの引き込み反応を生起させる。相手の音声にリズム同調する、引き込むことでコンテキストが共有され、一体感や共有感を実感し、相手の思いをしつかりと受け止めることができる。身体を介したコミュニケーションは、情報をやりとりする以前に、この一体感や共有感が大事で、まさに引き込みで会話がはずむのである。無音で生物のように柔らかな動きをする繊維状の駆動装置「バイオメタル」を用いて、語りかけに対して葉っぱと茎が絶妙のタイミングでうなずき反応する玩具「ペコッぱ」「花っぱ」を商品化している。――図③ 幼

児だけでなく大人もうなずきなどの身体的引き込みの重要性や不思議さを家庭で楽しむことができる。



図④

●おわりに

本システムは、乳幼児からの言語獲得に不可欠な身体リズムの引き込みに基づくコミュニケーション支援システムで、情報機器を介して身体的引き込みで思いを伝え合う身体的コミュニケーションの解明に構成的にアプローチできる有力なツールである。産学連携による研究成果を礎として大学発ベンチャー「インタロボット株式会社 <http://www.i-robot.co.jp/>」を2000年に設立し、身体的コミュニケーション研究の社会性、独自性、市場性を活かして事業展開を推進している。本システム・技術を利用し、市場に投入される商品は、身体性メディアロボット等のコミュニケーションロボットやインタラクティブ玩具だけでなく、携帯電話やインターネット等の音声インタフェース、e-learningやゲームソフト・音声認識ソフトへの導入など、教育・福祉・エンタテインメントをはじめ、人とかかわる広範囲な応用が容易に可能である[3]。

■参考文献

- [1] 渡辺富夫…人を引き込む身体的コミュニケーションの不思議さ、言語、Vol.32, No.6, pp.64-71, 2008.
- [2] 渡辺富夫…身体的コミュニケーションにおける引き込みと身体性―心が通う身体的コミュニケーションシステムE-COSMICの開発を通して―、ベビーサイエンス、Vol.2, pp.4-12, 2003.
- [3] 渡辺富夫…身体性メディアによるメディア芸術創造支援、情報処理、Vol.48, No.12, pp.1327-1334, 2007.

所有に関する行動の日中文化比較―子どもはいつ「中国人」になるのか―

山本登志哉

Yamamoto Toshiya

早稲田大学教授

事例1

CさんがDさんの部屋に遊びに行った。そこにはDさんと同室のEさんが読んだ本が置いてあった。Eさんはこのとき、外出してその部屋には居なかった。Cさんはそれが読みたいと思っていた本だったので、それを見てDさんに「これ貸してね」と言った。Dさんは「いいよ」と言った。Cさんは本を持って帰った。

事例2

ある立食パーティーで、Fさんは椅子に鞆をおいてその場を離れていた。しばらくしてFさんが鞆の所に戻ってみると、知らないう

ちに鞆の口が開いていて、そこには誰かのセーターが入れてあった。実はそれは友人のGさんのセーターだった。Gさんは置くところがないので、友人のFさんの鞆に入れておいたのだった。

この事例のやりとりの中に皆さんは何か違和感を感じるところがあっただろうか？あるいはまあしばしばあることで、特に変わった出来事とも思えないと感じただろうか？

山本が日本のさまざまなところでこの話をすると、まずは驚きや、あるいは強い違和感をもって受け止められることが普通である。このことをデータとして確認するために、簡

単な調査を試みた（山本・片・小湊・渡辺、2008）。対象は早稲田大学と中国政法大学の学部生であり、いずれも授業中にパワーポイントで上記の事例を提示し、それぞれに質問紙調査を行った。そのうち第二の質問はそういう行為をする人の人物像を、「好人物である」「信頼できる人である」「無邪気な人である」「身勝手な人である」「気さくな人である」「相手を無視している人である」など25種類の項目によって評価してもらうものであり、結果は予想以上に明確なものとなった。人物像を例に日中間で評価平均値に統計的な差があり、両者で評価が正反対になっている項目を説明すれば、いずれの事例でも日本

ではそのような行為をする人は「鈍感」で「変人」であり、「相手を侵害」していて、「好人物」ではない、というのが平均的な像であった。さらにDさんについては「身勝手」で「やや無邪気」という評価が加わり、Gさんは「信用できない人」だとされている。

これに対して中国ではいずれの場合も「普通の人」であり、「情に厚く」「親切」な人だという評価が強くなっている。またDさんは「自己主張が強く」少し「我が儘」で、Gさんは「気さくな人」という評価が日本と対極に表れている。

日本の授業などでこのデータを紹介すると、それに対する驚きはいつも相当なものである。上記の事例の人物がそういう「一方的で我が儘な人物」に見えてしまうという点で多くの日本人の見方は一致してしまう。日本人の目から見ると、中国の人は「自分のもの」と「他人のもの」の区別が全般に曖昧に見え、その結果、自分の領域が「不当に」、そして「一方的に」侵されてしまう感じを受ける。

だがこの評価を読んだ中国の人は日本人がとんでもない見方をしていると驚くだろう。

それは中国的な感覚では「相手と自分を一体のように感じ、お互いに自由にやりあっていること」であり、それこそがお互いの信頼関係を表し、その絆を表現する行為なのだ。逆に言えばそれができない日本的な関係はとても冷たい人間関係だと見られる。

では発達心理学的に見て、このような日中の関係の作り方の違いはいつ頃から生まれるのだろうか。

私は1991年に初めて日本でお小遣いに関するインタビューや質問紙調査を始め、1995年からは友人の片成男さん（現中国政法大学）と日中比較研究も始めた。やがてそれは日中韓越お小遣い研究へと展開していったが、そこで日中比較を始めた当初から非常に面白い現象として注目されてきたことの1つが、「子ども同士の奢り」の問題であった。

調べてみると日本では子どもを育て、教育する側の意識の中では奢りに対してかなり強力な警戒心が存在していることがわかる。では子どもの方はどうか。小学校低学年から中学年くらいになってお小遣いをもらうように

なると、子どもたち同志で駄菓子屋などに行き、お互いに買ったおやつを分け合ったり、奢ったりする行為も発生するようになるが、それに対してはしばしば否定的な視線が投げかけられ、子どもたちも慎重になっていく。次のインタビュー事例はそういう日本の子どもたちの奢り観を表す例である。

事例3

日本中2女子

調査者…そしたら友だちになにか自分のお金で食べ物をおごってあげるということは、これは自由にしてもいいと思う？

子ども…はい。

調査者…あんまり、でもやったことはないんやね？

子ども…まあ、でも、でも急にそうされても、される側は困りますけどね。ねえ、ちょっと。調査者…「私のおごり」とかいうのは、おごられる側が困る？

子ども…いや、だって、なんか、やっぱ、自分が、悪いじゃないですか。やっぱ向こうに払わせ

小学生のインタビューではそもそも「外で買い食いすること」あるいは「おやつを自分のお小遣いで買うこと」が禁止されている家もよくあるが、中学生くらいになればお小遣いの使い道についてはかなり自由度が高くなり始め、子どもたちも基本的には自由に欲しいものを買えると感じ始めている。にもかかわらず、奢りの経験は少ないままであり、しかも自分が相手に奢ると「相手が負担感を持つのでよくない」と考えるのである。

次の高2の女の子もこの「相手の負担感」の存在について承認している。

事例4

日本高2女子

調査者…じゃあマクドとか、モスバーガーでは何でおごってあげない？

子ども…ええ？　なんでって、うーん。ていうか、おご、おごってあげ、おごってもらうと、また今度おごってあげないとだめでしょう？　だからそんなにおごっておごられてしてるんやったら、最初から自分のは自分で出してお

けば、そういうのが起こらない。

調査者…ていうことは（ジューズぐらいなら）おごってあげても相手にそれほど負担にならないというふうに思う？

子ども…はい。はい。

調査者…でもマクドぐらいだと、あるいはモスバーガーぐらいだと、おごってあげたら、相手も負担に思うかもしれないと思う？

子ども…ああ、それは思います。

そうやって負担感のない関係を志向すると、お互いに自分の分は自分で払う割り勘の関係が実現することになる。また奢りの関係が友だち関係の中に「上下関係」を生むという認識も比較的しばしば親からも子どもからも聞くことである。実際日本で語られる奢りはほぼ「上司から部下へ」といった上下関係に基づくものであり、奢られる関係に入るということは、その人との間に上下関係を認めることになるわけである。したがって奢らないこと、割り勘とすることはお互いの関係を平等に保つために重要な意味を持つ。

では中国の子どもの場合はどうか。ここで

は中国の朝鮮族の子どものたちの事例を示してみよう。まずは奢りがどういう意味を持つのかについての子どもたちの考えの典型的なものを一例あげてみる。

事例5

中国朝鮮族小3女子

調査者…「玩具を友だちに買ってあげる」のは良いこと？　悪いこと？

子ども…よくありません。

調査者…「友だちにご飯をおごる」

子ども…いいです。

調査者…「友だちにプレゼントを買う」

子ども…いいです。

調査者…「友だちにおやつを買ってあげる」

子ども…いいです。

調査者…どうして玩具以外はみんないいの？

子ども…だって、今は勉強すべき時ですから、玩具を贈ると勉強に影響しちゃうかもしれない。せん。

調査者…じゃあそのほかはどうしていいの？　子ども…だって、まず他の人のことを考えているからです。

子どもは奢りを「相手のために」行うのだという意識がはっきりしていて、それは他のいくつかの利他的な行為と同一視されていることがわかる。では次にそういう子どもたちに対して、割り勘の方がいいという時に日本の親や子どもたちが考える理由をどう受け止めるか、その例を見てみよう。

事例6

中国朝鮮族高2男子

調査者…「お小遣いは自分のために使うものだから、おごらない方がいい」という意見をどう思う？

子ども…間違ってます。

調査者…どうして？

子ども…相手におごることでお互いの距離を近くすることができます。

調査者…「友だちにおごると彼が負担に思われるかもしれないので、おごらない方がいい」という意見は？

子ども…そうじゃないですよ。だって、おごるのに使う費用は自分が払うのだし、負担に

はなりません。もし（お返しに）プレゼントを買うのに苦しむというのなら、それも必要ないです。

日本ではお小遣いというのは「自分が必要なものを自分で買えるように」という目的で渡されるのが普通である。「まず自分のことをちゃんと自分で責任を持ち、人に迷惑をかけるないようにしなさい」という倫理感覚がその背後に見え隠れする。

だがここでこの高二の男の子はそういうお小遣いのあり方を頭から否定している。奢りはそれ自体が友だち関係を作り、維持し、発展させるために重要な要素の一つであって、とても大切なものであり、当然のこととしてお小遣いの用途の内に含まれるべきものである。そのことを否定することは「間違っている」、すなわち非倫理的なことなのである。さらに相手の負担感への配慮については、そもそも負担感が発生すること自体に疑問を持つ様子で、質問の意図さえうまく掴みかねている。

このようにすでに小学生の段階で中国の子

どもたちは自分と相手のお金の使い道を切り分けるということはせず、むしろ積極的に相手のために遣いあう、ということにも大きな価値を見いだしている事がわかる。ではそのような自他を分け隔てしないような（中国では「你我不分」ともいう）中国的な関係の成立は、子どもの発達に於いてどこまで遡ることができるのだろうか。

山本が日本の保育園や中国の託児所で行った観察によると、子どもは1歳後半になると、相手を窺いながら相手のものを獲得したり、あるいは「貸して」とか「ちょうだい」といった形で相手の許可を求めるような行動が生じ始める。――図① この点で日中の子どもたちの間に差はないが、その比率を見たときに、すでに2歳代で統計的な差が確認されるのである。

日本の子どもは2歳で3割近い場合に相手の意向を確認しながらそれを獲得しようとするが中国では2割に満たず、4歳になると日本では3分の2と一般化しているのに対して、中国では3分の1にとどまる。――図②

中国の子どもたちは何も言わずお互いに自

由に相手のものを使い合うのである。

このような関係の差が、これまでいろいろ見てきたような日中の関係の差に非常に良く対応することは明らかであろう。中国では実に2歳児から一貫して、お互いのものを比較的自由に使い合う関係にあり、日本では2歳児から「まず相手に断わって」使ったり、そもそも相手の資源を使うことを遠慮するような関係を築いていくのである。〈文化差が2歳で発生し始める理由については、山本の議論（山本・1997・2000）を参照〉

ではこのようなお互いの感覚の理解がたさを乗り越えて、我々は相互理解への道を築くことはできるのだろうか。現在私はこの「理解しがたい他者とのコミュニケーション形成」の問題に関心をもっていくつかの実践的な研究を試みているところである。その詳細はまた別の機会に述べることにしよう。いずれにせよ、まずはお互いの常識に潜む文化性に気づくこと、その上で相手の視点を対話的に理解することで自己を相対化し、異質な者同士の関係を再構築する手がかりを得るこ

と、そしてそれと同時にその他者との具体的な関係を実践的に作り上げていくこと、それらのいずれの要素が欠けても異文化間相互理解の深化は困難であろう。文化的に育つ人間を理解し、異なる文化をもった人間同士のよりよい関係を探っていくためには、そのような視点をもった対話的な研究の持続が不可欠であると考えられる。

弱肉強食ではない保育園児の資源配分 (日本1歳半～2歳半クラス)

表2 日本製儿班社会等级矩阵与班主任的评分分数

A/B/C Age Sex	Total
1/2/1 2:2.m[K,Y]	21
2/1/3 2:1.m	14
3/3/3 2:0.f	13
4/2/3 2:3.m	12
4/2/5 1:6.m	8
4/4/5 1:10.f	1
7/2/1 2:4.f	10
7/4/3 2:3.m	7
9/4/2 2:5.f	0
9/1/5 1:8.f	5
11/3/5 1:10.m	1
12/2/6 1:7.f	1
13/2/6 1:9.f	1
Total	70

Rigidity = 64.2% Linearity = 64.0% $r(A, B) = -.062$ $r(A, C) = -.278$
 $r(B, C) = .809^{**}$ $r(A, Age) = -.164$ $r(B, Age) = .116$ $r(C, Age) = .199$

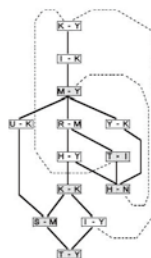
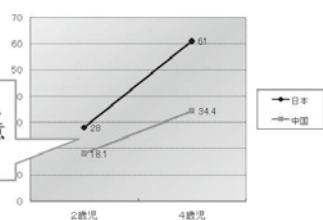


図2 優勢な劣勢社会关系图日本

図1

まず相手に断ってから獲得するか？

交渉出現率の年齢差と文化差



2歳ですでに、統計的に有意な文化差

山本登志 1997,2004

図2

① 脳の三位一体学説から情動の役割を考える

② 中国における幼児メンタルヘルス教育の実践と研究

③ 人を引き込む身体的コミュニケーション技術

④ 所有に関する行動の日中文化比較

⑤ ベビーマッサージとアタッチメントについての研究

⑥ 親の期待と幼児の発達について

⑦ 教育的視野の中の子どもの遊戯

⑧ 赤ちゃんはヒトに興味をもつ

ベビーマッサージとアタッチメントについての研究

沈月華*1・周念麗*2

Shen Yuehua・Zhou Nianli

*1 中国福利会国際和平婦幼保健院主任医師

*2 華東師範大学副教授

●問題提起

幼児の成長と心理発達の研究において、現在人々の関心を集めているホットな話題が3つある。医学モデルにおけるベビーマッサージ(touch)、心理学におけるアタッチメント(attachment)、感情調節(emotional regulation)である。医学モデルのベビーマッサージの、幼児の2種類の心理的側面における発達への関連性は、本研究が関心を寄せる一つの焦点であり、探求したい重要な問題である。

ベビーマッサージは幼児の心理発達にどのような作用があるのだろうか。アメリカでは、1983年にフロリダ州で設立された「ベビーマッサージ研究所」が「ベビーマッサージ治療法」(touch therapy)を始めた。20年間の実践で、ベビーマッサージは養育者の感情伝達と幼児の速やかな成長という2つの側面に優れた効果があるという事実

を証明した。彼らは研究の中で、母親に早産児や低体重児を毎日10〜20分間ベビーマッサージさせた。その結果半年の間に早産児と低体重児の体重が平均で47%増加し、情緒の不安定な幼児も明らかに活発になった。

しかし、ベビーマッサージと幼児の早期アタッチメントとの関係にかかわる研究は少なく、これを幼児の感情調節と関係づける研究はさらに数少ない。

アタッチメントと子どもの感情調節との関係に関しては、現在多くの研究がなされ、さまざまな方法で分析と予測がされているが、最も関心を集めているのは、親子関係が子どもの感情調節の発達の中で重要な影響力をもっていることとある(Cassidy, 1994; Kopp, 1989; Thompson, 1990, 1994)。

いわゆる感情調節とは、挫折・喪失感などのマイナス感情の後、速

やかに心の状態を調整し、安定した心情を回復することができる、あるいは積極的な心情に変えることができる能力を指す。

Casidy は、早くも1994年には、アタッチメントと幼児の感情調節との間に密接な関連があり、同時にアタッチメントと感情の社会化との間にも関連があると指摘している。Casidy は、各アタッチメントスタイルによる幼児の感情の表現・分かち合い・抑止における違いが、親子間において、アタッチメントに基づく対処法に影響を与えるだろうと考えている。

幼児のアタッチメントと感情調節には密接な関係があることを説く研究のほか、他の関連研究もいくつかあり、異なるアタッチメントスタイルの幼児が感情の表現・分かち合い・生理的反応（心拍数、副腎皮質ホルモンレベルを指す）などの側面で、異なる情景下では異なる反応を示すという研究が含まれる。それらの研究には未知の情景実験 (Braungart & Stifter, 1991; Grossmann, Grossmann, & Schwan, 1986; Izard, Haynes, Chisholm, & Baak, 1991; Malatesta et 1989; Spangler & Grossmann, 1993; Waters, Wippman, & Sroufe, 1979) 、成人のベビーマッサージと子どもの生理的反応（主に皮膚の伝導性を指す）(Dozier & Kobak, 1992) 、問題の解決 (Kobak, Cole, Ferenz-Gillies, Fleming, & Gamble, 1993; Kobak, Everhart, Ferenz-Gillies, & Seabrook, 1994) 、さらに、表現に影響する潜在力報告 (Kobak & Sceery, 1988) などが含まれる。同時にかなりの数の、アタッチメントおよび歩き始めの問題解決におけるマイナス心情の分かち合いと感情表現方面に関する (Matas, Arend, & Sroufe, 1978) 縦断研究がある。

上記の研究は私たちに、研究の新しい視点や、幼児のアタッチメントと感情調節のいくらかの相関性を示してくれた。しかしどれもまだベビーマッサージと幼児のアタッチメントおよび幼児自身の感情調節との関連に焦点を集めきれていない。したがって、本研究はこれを突破口に、実験という方法を通して、ベビーマッサージを受けた幼児とベビーマッサージを受けたことのない幼児の未知の情景実験や感情調節実験の中で表現される行為の相違点を分析し、それによってベビーマッサージと幼児のアタッチメントや幼児自身の感情調節との間にあるような関連があるか探ろうとするものである。

本研究の理論的仮説は、ベビーマッサージが幼児の安定型アタッチメントの形成を促進し、安定型アタッチメントの幼児にはより強い感情調節能力があるというものである。

● 研究対象

1. 被験者の選定

中福会国際和平婦幼保健院で出生し、かつ出生直後からベビーマッサージを受けた幼児30名、そのうち男児16名、女児14名。月齢範囲11～13カ月。平均月齢12カ月。これらの子どもがベビーマッサージを受ける頻度は毎日20分間。ベビーマッサージを受けた期間は1年間。被験者の家庭はすべて健全な家庭である。収入レベルはすべて中以上で、母親の学歴は高等専門学校あるいはそれ以上である。

2. 対照グループ被験者の選定

実験グループと対照グループの対比性を強めるために、30名のこれまでベビーマッサージを受けたことのない幼児を選定した。月齢と性別および家庭環境は実験グループと完全に同じにしたほか、被験者の選定においてはできるだけ心理的発達の特徴が同じになるようにした。対照グループの幼児を選定する際、ベビーマッサージグループと心理的発達レベルがちょうど匹敵するような幼児を求めるために、それらの子どもの父母にさらに「幼児の気質アンケート」調査を行った。その気質タイプがそれぞれ占める割合は実験グループと基本的に同じである。

●実験方法

1. 実験設計

本実験は2つの実験からなる。「未知の情況」実験と「ビンの中のおもちゃ」実験である。

1 つ目は M. Ainsworth の「未知の情況」実験 (Experiment of Stranger Situation) を改変したもので、その主旨は2グループの幼児のアタッチメントスタイルを観察し、その2グループの幼児の安定型アタッチメントの割合を比較することにある。

2 つ目の実験は N. Eisenberg の実験シリーズの中の「ビンの中のおもちゃ実験」(Toy in Jar) を改変したものである。この実験の主旨は2グループの幼児が「おもちゃを奪われる」という事件に遭遇し

た後の感情調節の行為表現を観察し、2グループの幼児のマイナス心情をコントロールできた割合を比較することにある。

2. 実験手順

国際和平婦幼保健院の約15㎡の静かな部屋に、被験者が母親に連れられて実験室に入る。部屋の中には3つのおもちゃが置かれている以外、邪魔になるような器材はほとんどなにも置かれていない。一人の被験者が実験に参加する時間は最長12分間である。

①「未知の情況」実験

M. Ainsworth の「未知の情況」実験 (Experiment of Stranger Situation) に基づき、本実験は幼児の月齢に沿って、実験時間と手順において少し変更した。表①は実験の手順である。

②「ビンの中のおもちゃ」実験

■遊びの要求

幼児は母親と隣り合って床に座る。母親に書いたカードには「母親は子どもの

表① 未知の情況実験手順

筋書き	実施時間	情景変化
母子入室	30秒	
母子遊ぶ	120秒	見知らぬ人入室
見知らぬ人と遊ぶ	120秒	母親去る
母子再会	60秒	母親が戻り、見知らぬ人が去る

表②
ビンの中のおもちゃ実験手順

筋書き	実施時間	情景の変化
子どもが一人で遊ぶ	90秒	おもちゃは自由に持って遊ぶことができる
子どもが一人で遊ぶ	90秒	おもちゃは透明な広口ビンに入れる。蓋は開けることができる
子どもが一人で遊ぶ	90秒	おもちゃは自由に持って遊ぶことができる
子どもが一人で遊ぶ	90秒	おもちゃは透明な広口ビンに入れる。蓋は開けることができない

行動に対していかなる反応もしてはならない。ただ子どもを注視することのみ許される。」と示されている。

■遊びの過程

実験者が母親に「始め」の信号を送ると、母親は電動のアヒルのおもちゃを子どもに見せ、アヒルのおもちゃで遊び始めさせる。実験者は被験者1人毎に2種の条件の実験を行う。一つはビンに蓋が軽く閉めてあり、子どもは努力すればビンの中からおもちゃを取り出すことが可能である。もう一つはビンに蓋がきつく閉めてあり、自分の力だけではおもちゃをビンの中から取り出せない。具体的な手順は表②に示す。

3. データの収集と処理

データの収集とコーディングについてはここでは割愛するが、信頼性係数については「未知の情景

表③
アタッチメントスタイル評定法※

アタッチメント 行為スタイル	一人で母親と一緒に	未知の人や事物に対して	母親と分離	母親と再会
安定型 アタッチ メント	周囲の環境やおもちゃを積極的に探索し、母親の傍にいつもいるわけではなく、たまに近寄るか母親に触る。目で母親を見、母親に微笑みかけ、あるいは母親と距離を保って言葉を交わし、母親と好きなおもちゃを分けあうことも多い。	素早く母親の近くに帰り保護と慰安を求める。母親の励ましで、未知の人とうまく交流できる。	泣きだす者がいる。泣かなくても、不安を表現する。おもちゃに対する注意力が減少する。	素早く悲哀や不安が解け、迅速に母親と一緒に遊ぶことができるようになる。
回避型 アタッチ メント	母親に関心を示す行為が少なく、もっぱら周囲の環境やおもちゃを探索する。	自由活動や他のさまざまな程度のストレスのもと、母親との身体的接触が少なく、すすんで母親と言葉を交わすことも少ない。未知の人や事物に対し大胆で、尻込みしない。	泣かない。悲しみの程度が小さく、相変わらずもっぱらおもちゃで遊ぶ。	母親が戻ってきたことを積極的に歓迎しない、はっきりとした喜びも表わさない。
アンビ バレント型 アタッチ メント	母親を見ることが少なく、母親の存在をなんとも思っていないが、時折身体的接触をする。	未知の人を受け入れるのが難しい。 尻込み、拒絶	反抗を示す。泣きだし、悲しみの程度が高く、なかなか平静にならない。	なんとも思わない、母親に取り合わない。敵意があるように見える。

※この表は李秀紅等の論文『75例の乳幼児の母親に対する愛着性質および影響要素』（中国心理衛生雑誌2004年第18巻第5期、p292）を参照して作成した。

実験」が0.87、「ビンの中のおもちゃ実験」が0.93の数値を示した。

表③のアタッチメント行為スタイルに従って、それぞれ各項目の行為をコーディングする。上述のように定義される行為が出現した場合、5秒毎に一枠として、一回と記入する。

4. 結果と分析

①アタッチメント行為スタイルのグループ間比較

アタッチメント行為スタイルをここでは3スタイルに分けている。

表② 1つは安定型、1つは回避型、もう1つはアンビバレント型である。以下、この3スタイルの相関行為の平均発生率の分析から着手して、ベビーマッサージグループと対照グループに対し、グループ間比較を行った。

表④は両グループの被験者のアタッチメント行為スタイル相関行為発生率の平均値と標準偏差、およびt検定の結果である。

表④の結果は、ベビーマッサージグループの安定型相関行為の平均発生率は対照グループをはるかに上回り、その差異は $p < .001$ の有意水準に達していることを示した。一方、回避型相関行為とアンビバレント型相関行為の平均発生率は対照グループをいずれも下回り、特にアンビバレント型相関行為の平均発生率は $p < .01$ の有意水準で対照グループより低いことを示した。

②感情調節のグループ間比較

2グループの幼児を2組の条件、すなわちビンに軽く蓋をする条件ときつく蓋をする条件のもとで、感情調節実験中に表現される気持ち

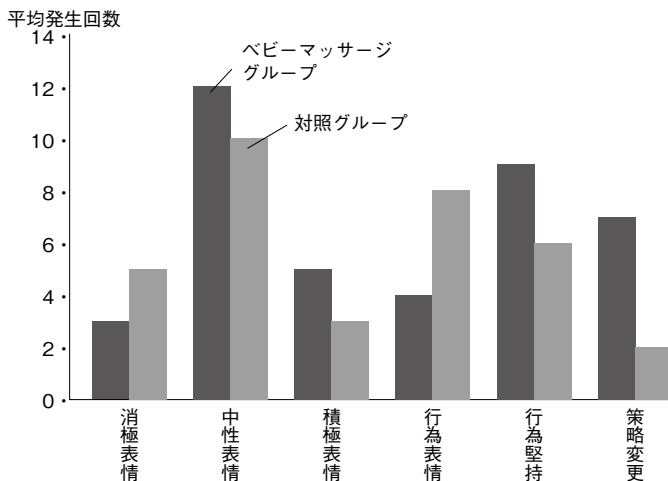
の表現と行為をそれぞれコード分析し、平均を出し、結果を図①に示した。

図①よりベビーマッサージグループの幼児は表情においても行為表現においても、対照グループより多くの積極性があることがわかる。つまり気に入っているおもちゃを奪われた時もその感情調節能力が高いということである。

表④ 幼児アタッチメントスタイル 相関行為の平均発生率

グループの別	安定型相関行為		回避型相関行為		アンビバレント型相関行為	
	M	SD	M	SD	M	SD
ベビーマッサージグループ	0.096***	0.064	0.108	0.106	0.042	0.046
対照グループ	0.073	0.079	0.113	0.114	0.060**	0.072

注：ここでの発生回数は毎5秒を1単位と計算。*** $p < .001$, ** $p < .01$



③ 幼児のアタッチメント行為スタイルと感情調節との関連

被験者の実験中に現れたアタッチメント行為スタイルと感情調節の心情と行為の平均発生率に相関分析を行い、表⑤の相関分析結果を得た。

表⑤の結果は、幼児の安定型アタッチメント行為と、感情調節の積極心情と積極行為の平均発生率との間には強い正の相関関係があることを示している。相関係数が0.68に達しているからである。一方、回避型アタッチメント行為およびアンビバレント型アタッチメント行為と、感情調節の積極心情と積極行為の平均発生率との間には強い負の相関関係があり、その相関係数はそれぞれ-0.40と-0.38である。表⑤はこの2つの相関係数はそれぞれ $p < 0.01$ と $p < 0.10$ の水準にあって有意性があることを示している。

表⑤ 幼児のアタッチメント行為スタイルと感情調節の気持ちと行為との相関

	感情調節	
	積極心情	積極行為
安定型 アタッチメント行為	0.68****	0.40
回避型 アタッチメント行為	0.11	-0.40*
アンビバレント型 アタッチメント行為	-0.29	-0.38*

**** $df=60$, $p<0.01$, * $df=60$, $p<0.10$

5. 討論

実験では次の3つの非常に興味深く重要な結果が得られた。

1. ベビーマッサージグループの安定型相関行為の平均発生率は対照グループをはるかに上回った。一方、回避型相関行為とアンビバレント型相関行為の平均発生率はいずれも対照グループより低かった。特にアンビバレント型相関行為の平均発生率の差異がより大きい。

2. ベビーマッサージグループの幼児は表情においても行為上の表現においても、どれも対照グループに比べより高い積極性がある。つまり気に入っているおもちゃを奪われたときにその感情調節能力がより高いということである。

3. 幼児の安定型アタッチメント行為と感情調節との間には強い正の相関関係がある。一方、回避型アタッチメント行為およびアンビバレント型アタッチメント行為と感情調節との間には比較的強い負の相関関係がある。

よってベビーマッサージは幼児の安定型アタッチメント形成を促進し、安定型アタッチメントの幼児には高い感情調節能力があるという仮説は検証された。

① 脳の三位一体学説から
情動の役割を考える

② 中国における幼児
メンタルヘルス教育の
実践と研究

③ 人を引き込む
身体的コミュニケーション
技術

④ 所有に関する
行動の日中文化比較

⑤ ベビーマッサージと
アタッチメントに
ついての研究

⑥ 親の期待と幼児の
発達について

⑦ 教育的視野の中の
子どもの遊戯

⑧ 赤ちゃんはヒトに
興味をもつ

親の期待と幼児の発達について

—中国11都市3000名の幼児の調査報告

周 念麗

Zhou Nianli

華東師範大学副教授

●要旨

2008年6月から2009年2月にかけて、中国の東部、西部、南部、北部、中部の5地域11都市の1～6歳児の保護者に、子どもの能力への期待に関するアンケート調査を行った。平均値から見ると、子どもの能力への期待は、高いほうから低いほうへ並べると「自律能力（自分を律する能力）」「ソーシャルスキル」「リーダーシップ」「認知能力」「自立能力（自分で自分のことをする能力）」の順であった。

この調査結果は、中国の若い保護者が就学前児童の自己コントロール・社会性・指導力の重要性を意識し始め、これまでの「知力発達至上」の意識が変わってきていることを示した。

しかし、11都市の1～6歳児を持つ保護者の自由回答をまとめた結果からは、彼等が最も重視する問題は子どもの年齢が上がるにつれて、

生理的保健的な発達から心理的な発達へと移ってきてはいるが、どの年齢段階でも、1～6歳児の認知的発達への重視の度合いが感情発達と社会性発達を上回っていることがわかった。

キーワード：中国1～6歳児の親 子どもの能力への期待 重視する問題

●問題提起

中国の1～6歳児の親は、中国の伝統文化や一人っ子政策の実施によって、その大多数が親の大きな期待を背負って成長してきている。私たちは1997年に上海と東京の1～6歳児の親の子どもの能力への期待について大規模な調査を行った。「子どもが将来どのような学

歴を持つことを望むか」という質問に対し、東京の保護者は50%が短大・高専あるいは四年制大学と答え、残り50%の保護者はどんな学歴でもいいと答えた。一方、これと対照的なのは中国上海の保護者である。100%が自分の子どもは少なくとも四年制大学、そのうち50%はできるなら博士号を取ってほしいと考えている。このような高学歴への期待は、中国伝統文化の一つの縮図かもしれない。というのは二千年来「学んで優ればすなわち仕える」（成績がよかったら官吏になれる）という思想や、「すべて皆下品なり、ただ読書高きがあるのみ（どの職業も下等である、ただ学問のある士大夫だけが上等である）」という理念が先祖代々父母の心に深く植えつけられているからである。

では、これら重い期待を背負った一人っ子の最初の世代が成長して父母になった後、自分の子どもに対し、能力面でどのような期待を抱くのだろうか。この期待と彼等の親世代が抱いていた期待との違いはどこにあるのだろうか。この疑問への答えを探るために、私たちは中国の東部、西部、南部、北部、中部から経済発展レベルの違う11都市を選んで1〜6歳児を持つ父母に対しアンケート調査を行った。

●調査方法

1. 参加者

①地区サンプルの選定

地区サンプルの選定は主に以下2点を考慮した。すなわち代表的な地域であることと代表的な経済状況であることである。

地域的な観点からは、華東地区から上海、南京、杭州を選定した。華南地区から貴陽と福州を選定。華中地区からは武漢を選定した。華北からは天津、東北からは根河、長春、ハルビンを選定し、西北からは西安を選定した。

経済状況の観点からは、華東地区の上海、南京、杭州の3都市は発展地域に属し、貴陽と根河は全国でも経済が発展していない地区であり、その他の6都市はどこも中レベルの発展地域に属する。

②参加者の年齢

本調査に参加した各地の1〜6歳児の父親の年齢の範囲は32歳から36歳で、平均年齢は34歳。母親の年齢範囲は30〜32歳で、平均年齢は31歳である。これは若い父母の集団である。

③参加者の学歴

本調査への参加者の学歴では、経済の遅れている内モンゴルの根河や貴州省の貴陽市の父親の学歴が中学校・高等学校を主としている他は、他の都市の父親の学歴は四年制大学が主で、修士号や博士号取得者もいた。

母親の学歴も父親の学歴と似通っており、根河と貴陽を除いて、他の9都市の母親の学歴は四年制大学と高等専門学校に集中している。

ここからわかるのは、本研究の参加者は高学歴を主とし、低学歴も混在する集団であるということである。

④参加者の職業

参加した父親の職業は根河と貴陽以外の9都市において、公務員、企業経営者等、ホワイトカラーが主で、根河と貴陽のみがブルーカラーや無職を主としていた。

母親に関しては、長春、天津、西安、ハルビン、上海、杭州の都市において、主に科学教育従事者、公務員、企業経営者等、ホワイトカラーなど社会的・経済的地位が高い職業に集中し、根河だけは多くが無職の状態であった。南京と貴陽の母親の職業は比較的分散していた。本調査の参加者には、社会的・経済的地位が比較的高い職業が多く、同時にさまざまな性質の職業も混在していた。

上記のことをまとめると、調査の参加者は中国のさまざまな経済地区、年齢を代表し、高学歴で社会的・経済的地位の高い職業に従事している者が多いが、さまざまな層の学歴と職業の人が少なからず存在する集団である。この集団の参加者は、現在の中国の1～6歳児の父母、特に社会的・経済的地位の上位に属する父母の、子どもの能力への期待と心情を全面的に反映しているというべきである。

●調査内容

調査内容は2部から構成される。1つは子どもの能力への期待に関する照合表 (check list) であり、5段階評価 (five point) 法をとっている。「気にしない」から「とても期待する」まで、相応する点数は1～5ポイントである。2つ目は自由回答式 (open-end test) 質問である。保護者に、自分の子どものどの面の発達にもっとも関心が

あるか尋ねた。

私たちは1～6歳児の保護者10人へのインタビューを通して、子どもの能力への期待に関するチェックリストを作成した。因子分析 (factor analysis) を通して、5つの因子にまとめた。具体的内容は以下のとおりである。

因子1 自律能力 (自己を律する能力)

◎小遣いの浪費をしない

◎気に入っているおもちゃを友達に貸すことができる

◎許可を取ってから何かをする

◎大人が話している時にむやみに口をはさまない

因子2 ソーシャルスキル

◎小さな動物や他の人に同情し、手助けをする

◎先生や家の人に進んで挨拶することができる

◎手助けされたときに進んでありがとうと言える

◎自発的に並んで待つことができる

◎丁寧に人に手助けを求めることができる

因子3 認知能力

◎簡単な英語の単語が言える

◎10までの数字を知っている

◎簡単な漢字が読めて書ける

◎長針と短針で示す時計が読める

因子4 自立能力 (自分で自分のことをする能力)

◎一人で1時間留守番することができる

◎戸外で一人遊びができる

◎あまり鋭くないハサミを一人で使うことができる

◎夜、一人で眠ることができる

因子5 リーダーシップ

◎友達と意見が違ったとき説得できる

◎友達の間でリーダーになれる

◎友達とけんかした後、自己の感情をコントロールできる

◎友達の間で人望がある

信頼性検査を行ったところ、本アンケートの内部一貫性信頼性係数は0.72であった。これはこの調査が比較的信頼性の高いアンケートであることを示している。

●調査結果

1. 子どもの能力への期待調査の結果

表1は11都市における参加者の子どもの能力への期待チェックリストを選択した結果を示している。

表1から、11都市の1～6歳児の父母の子どもの各種能力発達への期待値は高いほうから、「自律能力」「ソーシャルスキル」「リーダーシップ」「認知能力」「自立能力」の順であることがわかる。私たちはこれまで、中国の保護者は子どもの認知能力を最も重視していると認識していたが、この結果は、それとは違っていて、いささか意外である。

しかし、子どもの「自立能力」への軽視はこれまでと変わっていない。

各地区の参加者の期待値からみると、ハルビンの父母の子どもの能力への期待が最高で、子どもの認知能力を除いて、他の4項目への期待平均値はどれもトップである。これと対比をなすのは、南京で、父母の各項目への期待値はどれも比較的低い。根河の父母の子どもの認知能力への期待は最も高い。これらのデータから、父母の子どもの能力への期待は経済発展と逆相関関係を呈することがわかる。

2. 最も重視する問題

自由回答式質問「子どものどの方面の発達に最も関心がありますか？」について、私たちはクラスター分析を行った。おおよそ「生理保健」「栄養」「認知発達」「感情発達」「社会発達」の5つに集団化できる。その他の集団化できなかった回答は除外した。詳細な結果は図1に示した。

図1から、子どもの年齢が上がるにつれて、父母が重視する発達分野は生理保健から心理発達に変わっていくことがわかる。だが、どの年齢段階でも、認知発達への重視は感情や社会発達への重視を大きく上回っている。しかも年齢が上がるにつれて、認知発達への重視が次第に高まっていることもわかる。

●討論と考察

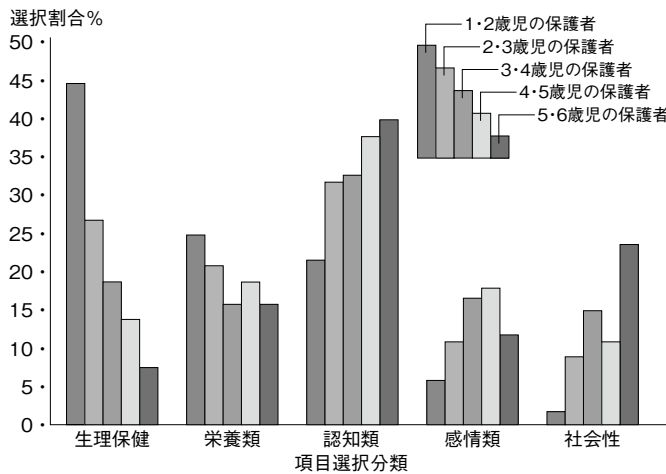
以上をまとめると、中国のさまざまな地域と経済的地位を代表する1～6歳児の父母は、ちょうど育児の矛盾の中にあるといえる。世界

的な情報化の時代にあつて、中国の11都市の1～6歳児の父母は国際的育児理念の影響を受け、伝統的な「知力発達」への高い期待から、子どもの自律能力、ソーシャルスキル、リーダーシップの重視へと転換し、しかもこれら非認知能力への期待が認知能力への期待を上回っている。一方で、伝統的な考え方をやはり受け継いで、子どもの自立能力の発達は軽視している。育児矛盾にあるというもう1つの証拠は、児童の能力の発達への期待と実際に重視する問題との落差である。1～6歳児の父母は、どの年齢段階でも、自分の子どもの認知発達への重視は感情面での発達や社会性の発達を上回っているのである。

この種の矛盾した心情に対し、私たちは忍耐をもって父母自身がこの種の認知衝突を解決するのを待つばかりでなく、適切な時期に、彼らに提言をして、現実と伝統、期待と重視の落差がもたらす育児矛盾の迷いから抜け出す手助けをする必要がある。

表① 11都市における父母の子どもの能力への期待の平均値

都市	自律能力	ソーシャルスキル	認知能力	自立能力	リーダーシップ
上海	4.34	4.30	3.92	3.77	4.21
長春	4.45	4.36	3.95	3.69	4.30
天津	4.36	4.34	3.96	3.65	4.14
西安	4.25	4.25	3.79	3.69	4.11
根河	4.41	4.30	4.22	3.62	4.12
ハルビン	4.50	4.45	4.08	3.81	4.39
貴陽	4.28	4.24	3.92	3.71	4.12
南京	4.25	4.20	3.95	3.69	4.07
福州	4.39	4.29	3.77	3.76	4.15
武漢	4.31	4.32	3.84	3.81	4.09
総平均	4.35	4.31	3.94	3.72	4.17



教育的視野の中の子どもの遊戯

華 愛華

Hua Aihua

華東師範大学副教授

- ① 脳の三位一体学説から情動の役割を考える
- ② 中国における幼児メンタルヘルス教育の実践と研究
- ③ 人を引き込む身体的コミュニケーション技術
- ④ 所有に関する行動の日中文化比較
- ⑤ ベビーマッサージとアタッチメントについての研究
- ⑥ 親の期待と幼児の発達について
- ⑦ 教育的視野の中の子どもの遊戯
- ⑧ 赤ちゃんはヒトに興味をもつ

●遊戯と教学との関係

本来、遊戯と教学は異なるものである。子どもにとって、遊戯は学習であるが、学習は遊戯とは限らない。なぜなら学習には2種類ある。一つは自発的、無意識な学習で、もう一つは教学が関与する学習である。遊戯は本来、教学とは無関係であるが、学習とは切っても切れない関係である。

遊戯(遊び)は子どもの成長発達によい効果を果たすことから、教育者は教学の中で、遊戯を取り入れれば、教育効果も倍増するのではと考える。しかし、遊びが教育者の教育目的を達成するための道具になると、遊び本来

の目的でなく、特定の目的として使われてしまうので、遊びの本質である自由が奪われてしまうことになる。

●遊戯とは何か

■生物学的な視点から

- ・遊戯は動物や人にとって本能であり、天性である
- ・高等動物であればあるほど、遊戯に対する衝動が大きい
- ・遊戯は小動物にとって生存本能の訓練である

■哲学的な視点から

- ・遊戯とは自由意志の現れである(非功利性——外的目的がない)
 - ・自由とは心理的体験である
 - ・自己コントロール(自ら望んで)——任に堪えられるという達成感(力の及ぶ限り)
 - ※このため遊戯には非常に大きな選択的自由度があり、積極的な気持ちの体験になる
- ### ■教育学者から見た遊戯
- ・遊戯とは教育の手段の一つである
 - ・遊戯の発達の価値こそが教育の目的である
 - ・遊戯の中に教育の契機が隠れている
 - ・遊戯は教師の道具になる
 - ・自発的遊戯に対する教学を強化
 - ・遊戯の手法を用いて教学を行う

■発達心理学者から見た遊戯

- ・遊戯とは幼い心理の表れである、個体の成熟過程における特有の行為
- ・遊戯と個体の発達には密接な相関性がある
- ・発達を反映——発達を強固——発達を促進
- ・遊戯の発達の価値
- 感情——現実的対立面（真のものと偽りのもの）——発散補填
- 認知——作業的対立面（結果と過程）——代替転換

●幼稚園における遊戯教学の誤り

幼稚園での教育重視の遊びに、いま、主に2つの誤りがある。

- ・1つ目は、遊戯に対する感情と認知の対立である。

遊戯の感情的価値を重視した場合、教師は遊戯に全く関与しない。しかし、遊戯の認知の価値を追及した場合、教師は遊戯に必要な上に関与し、本来の遊びができなくなる。

- ・2つ目は、遊戯と教学の関係が入り混じることである。

幼稚園カリキュラム改革の理念は、「幼稚園は遊戯を基本活動にすべし」である。しかし、幼稚園は就学前教育の一つであり、教学活動は必然のものであるので、遊戯と教学という2つの異なる性質の活動を融合させるために、次のような考え方になろう。「基本」は遊戯の形式で教学活動を展開しているが、「遊戯を基本活動とする」ということは、遊戯と教学が入り混じることになる。結果、多くの偽りの遊戯と発達によりパフォーマンスを重視する授業が行われ、本来の遊びは保障されない。

ある幼稚園の子どもと親の対話を見てみよう。

親…「さっき遊んでたの？」
園児…「違う、遊んでいたんじゃないくて遊戯していたの」
親…「遊戯して楽しいでしょう？」
園児…「でも遊戯が多すぎて、遊ぶ時間がなくなっちゃう…」
親…「遊戯は遊びでしょう？」

園児…「遊戯は遊びじゃないよ、遊戯は先生と一緒に、先生の話をきかなくちゃいけないけど、遊びは好きなようにできるもの」
親…「でも幼稚園で遊んでいるとき、先生はいつもいっしょでしょう？」
園児…「遊んでいるときは、先生はみているだけ、何も言わないよ。」

幼児園の子どもはなぜ「遊戯」と「遊び」をわけなのか。幼稚園カリキュラム改革において、「幼稚園は遊戯を基本活動とする」を実践することが難しいのはなぜなのか。

●遊戯問題の文化的解析

「寓教于楽」と「寓学于楽」

中国伝統教育における遊戯に関する原則は以下のものである。「業精於勤、荒於嬉」（学業の進歩は勤勉により、後退は遊戯によるものである）。すなわち、学業の成功をおさめるには、勤勉であるべきであり、遊ぶことによつては、学業が荒廃してしまう。

また、現在では、遊びと教学について、「寓

教於楽^レ（教にありて楽しむ）を提唱している。『寓教於楽』とは、「遊戯の中に『教え』がある」こと、遊戯に教育の功利性をもたせること。「教え」という目的で遊戯をデザインしたため、子どもが遊びと認めない『遊戯』が頻出してしまいう皮肉な結果となった。

私は『寓学於楽』（学にありて楽しむ）を提案したい。『寓学於楽』とは、「伝えたい学習情報を遊戯の環境と素材に潜ませ、子ども一人ひとりがその中から何を獲得できるか、どれだけ獲得できるかは、各個人の特徴と環境によって決まる。そこで教師は子どもの遊びを見守り、子どもの発達レベルを把握し、必要な手助けをする。

●「遊戯を基本活動」にすることへの提言

1 つ目は、遊戯と教学の境目をはっきりさせる。これは比較的容易に実行できる。

2 つ目は、遊戯と教学の境目をあいまいにする。すなわち、遊戯と教学の両者を融合させ、成長しあうようにする。それを実現する

には、教師の高い専門的素養が求められる。

「遊戯と教学」をいかに融合させるか。その鍵は遊戯と教学が互いに成長できることにかかっている。教学のために遊戯をデザインし、目標を遊戯の中に潜ませておく。そのため、教師には、3 つの留意点と3 つの能力が求められている。

※ 3 つの留意点…

1. 目標と遊び方への配慮… 教学目标を楽しい遊び方にデザインする能力。

— 教育性を重視

2. 遊び方と遊びの楽しさへの配慮… 魅力的な結果で遊びへの興味を刺激する。

— 楽しさを追求

3. 遊びの楽しさと発達… 子どもの発達レベルに即した遊びのデザイン。

— 発達段階に適すること

※ 3 つの能力…

遊戯で教学を促進させ、遊戯の中で教学の契機をとらえ、遊戯を中断させないために、教師は以下の能力が必要である。

1. 幼児の遊戯に含まれる発達レベルを正確

に解説する能力

2. カリキュラム目標と幼児の現在の発達を正確に判断する能力

3. 幼児の行動意欲へのサポートを前提にした臨機応変に誘導する能力

一定の専門的素養がなければ、活動の功利性により遊戯の本質が失われやすく、不適切な遊戯は幼児の遊びの権利を奪いやすいので、むしろ遊戯と教学を並列させ、教学において教え方を研究し、遊戯の中で幼児を研究するほうがよい。こうすれば現在の教師の専門的素養の形成に有効な道筋となる。

① 脳の三位一体学説から
情動の役割を考える

② 中国における幼児
メンタルヘルス教育の
実践と研究

③ 人を引き込む
身体的コミュニケーション
技術

④ 所有に関する
行動の日中文化比較

⑤ ベビーマッサージと
アタッチメントに
ついての研究

⑥ 親の期待と幼児の
発達について

⑦ 教育的視野の中の
子どもの遊戯

⑧ 赤ちゃんはヒトに
興味をもつ

赤ちゃんはヒトに興味をもつ——赤ちゃんの対テレビ行動の解析より——

谷村雅子

Tanimura Masako

国立成育医療センター研究所成育社会医学研究部部長

私はテレビの子どもへの影響を研究しております。本日は、テレビに対する赤ちゃんの反応や好きなCMの特性についての研究結果を基に、赤ちゃんはヒトに最も関心をもつことをお話ししたいと思います。そして、現代社会では赤ちゃんの対人経験が少なくなっているのだ、どのようにしたら良いかを皆様と考えたいと思います。

1. 赤ちゃんは画面のヒトに関心をもち、親に共感を求める——集団調査・行動観察より——

赤ちゃんのテレビに対する反応を集団調査と行動観察で調べた。3カ月から24カ月の子ども1600人を対象として、テレビとの関わりについての質問紙調査を行った。その結果、3〜4カ月ではテレビの光や音に反応するだけだが、お座りができる頃にはじっと見たり音楽に合わせて身体を動かし、はいはいができるようになるとテレビに近づいて行って、好きなキャラクターが登場すると喜んだり声をかけた

りし、立てるようになると登場人物の真似をする。そして、1歳半頃には一緒に見ている親に指さして質問しながら、親と一緒にテレビを楽しむようになることが示された。

次に、プレイルームで12分間のビデオを流して、0〜1歳児と親の自然状態を観察した。——図①——子どもはテレビがついているといういろいろな反応行動をとるが、好きなキャラクターが登場すると喜んで親の顔を見たり、指さして質問するなど、親と一緒に見ていればコミュニケーションのきっかけになる様子が観察された。そして、見る場面や見ない場面、真似したり声を出す場面が子どもたちに共通していたので、映像や内容に、子どもの反応行動やコミュニケーションを誘発しやすい特性があることが判った。

呈示したビデオは、赤ちゃんが好きな番組（赤ちゃんやぬいぐるみ人形が登場するCM、幼児番組のオープニング・人形劇・体操）と興味なさそうな番組（野球、風景、市民大学）を繋いだ。このビデオを

66場面に分けて各場面の属性を評定し、属性をもつ場面ともたない場面との間で平均視聴度を比較した結果、よく見る場面は登場人物が笑顔で視聴者の方を向いていて、逆に横向きや斜めや後向きだとあまり見ないことが判った。——図②

反応行動では動作や音声の模倣が頻繁に観察されたが、動作の模倣対象は、すべて画面のヒトやキャラクターで、笑顔で視聴者の方を向いており、動物の真似はしていなかった。音声の真似は、ヒトやキャラクターが発するヒトの声の言葉や歌だった。赤ちゃんは自分が笑顔で働きかけるヒトを真似するようだ。

各反応行動の後では、質問の後はもちろんだが、動作や言葉の模倣の後も、音楽に合わせて体を動かした後も、画面に微笑んだ後も、最も多い行動は親の顔を見ることだった。親はそれに対して、頷いたり誉めたり、一緒に真似したり歌ったりして応えていた。

以上のように、赤ちゃんは、自分に笑顔で働きかける画面のヒトに関心をもつて、画面のヒトの行動や言葉を模倣するが、応えてくれる親に共感を求めることが判った。

2. 赤ちゃんは笑顔で視線を向けるヒトに最も関心をもつ

——好きなCMの特性解析より——

図②

視聴度と場面属性			
66場面に分け、各場面の属性を評定し属性の有無で平均視聴度を比較			
場面属性	平均視聴率 (%)	p	
該当場面 差該当			
主な登場人物の種類	動く物の登場なし 25.43	< 69.83	< .01
	動物のみ 50.21	< 70.38	.01
顔の向き	視聴者向き	75.14	< 65.95 < .01
	横向き	62.58	< 71.09 .04
	表情 笑顔多い	72.99	< 64.83 .02
表情 大きさ	クローズアップ	74.74	< 66.36 .01
	前奏	77.64	< 66.87 .01
	歌	73.03	< 65.51 .03
音声	効果音	79.02	< 67.18 .01
	明るく楽しい印象	71.60	< 60.09 .01

→登場人物が笑顔で視聴者の方を向いている場面をよく見る
 ○ 横向き、斜め、後向きの場面はあまり見ない



テレビCMには多様な情報が流れるので、赤ちゃんが好きなCMの特性を調べると赤ちゃんが何に最も関心をもっているのかを知ることができるとは限らないかと考え、0〜1歳児1600名のテレビ視聴についての質問紙調査に記載された好みのCM44本とその前後に放映されたCM42本を録画して、属性を比較した。

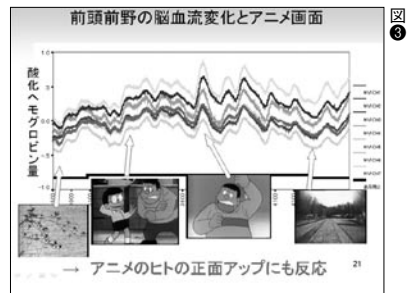
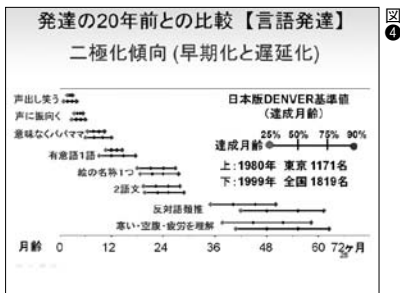
その結果、赤ちゃんが好きなCMは、赤ちゃんや子どもなどが笑顔で視聴者の方を向いて、呼びかけたり、語りかけたり、踊ったりしていて、可愛い・明るい・楽しい感じであることが示された。多変量解析では赤ちゃんが好むCMの特性として、登場人物が笑顔で視聴者方向を向いていること、CMの最初に子どもの声が聞こえることが推定された。テレビ画面から流れる大量の情報の中で、赤ちゃんは自分に笑顔の視線を向けるヒトに最も関心を示すことを示唆しているのである。

赤ちゃんが笑顔の視線を向けるヒトに関心をもつことは、多くの実験研究も報告している。例えば以下などが挙げられる。新生児が顔に似た特徴を持つ絵を長く注視した。新生児が自分の方を見つめるヒトの顔写真を、視線が逸れた顔写真より長く注視した。4カ月児が自分の方を見つめる顔写真を見た時にのみ、顔認知に関連する脳の部位が活性化した。4〜5カ月児は

母親がアイコンタクトを維持しながらあやした時に較べて、途中で視線を逸らすと母親への注視も児の微笑も減少した。9～13カ月児が母親の笑顔を見た時に前頭部が活性化した。成人がヒトの笑顔を見た時に眼窩前頭部が活性化した、などである。私たちも、多くの乳幼児が視聴しているビデオソフトを成人に視聴してもらって、視聴時の前頭部の脳血流を近赤外線分光測定装置で計測したところ、登場人物が視聴者方向に働きかける場面で活性化していた。

アニメでも前頭前野が活性化した場面は、ヒトやキャラクターがアップで視聴者の方を向いている場面だった。——図④ ヒトは新生児期から顔認知能力を備え、成人しても自分への笑顔の視線に関心をもって反応するものと考えられる。

では、チンパンジーではどうか、動物園のチンパンジー村で19頭のチンパンジーに初めてテレビを見せた。チンパンジーたちは最初は大騒ぎでテレビの前に集まって来たが、すぐに慣れて、好奇心の強い若者が最後まで熱心に見入っていた。チンパンジーたちに見せたビデオは、自分たちと同種のチンパンジー、敵であるライオン、どちらでもないシマウマの映像だが、同種のチンパンジーに最も強く関心を示した。ヒトはヒトに、チンパンジーはチンパンジーに生物学的に最



も関心をもつのだろう。

ここまでをまとめると、ヒトは生物学的にヒトに関心をもつ。新生児期から顔認知能力を備え、大人になっても自分に向けられた視線に関心をもつと考えられる。

3. 現代社会における乳幼児の対人経験の減少

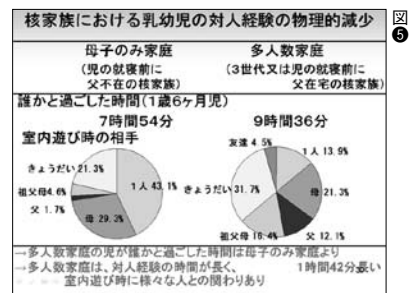
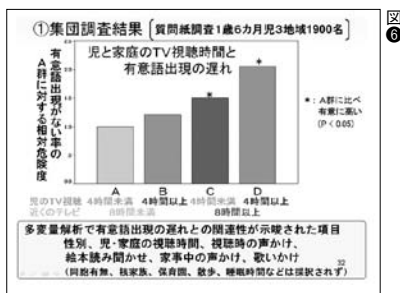
しかし、現代社会においては、乳幼児の対人経験が減少している。日本版DENVERの1980年と1999年の言語発達の基準値を比較すると、20年前に較べ、有意語を話し始める時期や二語文を話し始める時期などが遅くなっており——図④、言語発達の遅延化傾向がみられる。このような言語発達の遅延化の原因はいろいろ考えられるが、1つは日本ではこの20年で核家族化が急速に進んでいることだ。1歳6カ月児が寝る前に父親が不在であった核家庭と、三世代または子どもが寝る前に父親が帰宅していた多人数家庭を較べると、多人数家庭の子どもの方が誰かと過ごした時間が1時間42分長く、また、さまざまな人と遊んでいた。日本では、核家族化の上に父親の帰宅が遅くなったため、乳幼児の対人経験が質・量ともに物理的に減少してきた。——図⑤

もう1つの大きな原因は、現代社会では、テレビ・ビデオ、インターネット、携帯電話などの映像メデイ

アが普及して、乳幼児期の対人経験が減少していることだ。1歳6カ月児1900名の質問紙調査の結果、近くのテレビが長時間ついていてかつ視聴時間が長い子どもが有意語をまだ話さない率は、近くのテレビがついている時間が短くかつ視聴時間が少ない子どもの2.1倍で、長時間視聴と言語発達の遅れとの関連性がみられた。――図6

テレビ長時間視聴と言語発達の遅れとの関連性の理由を調べるため、親の発話状況を調べた。すると、テレビがついていると、歌と一緒に口ずさむことは増えるが、会話の頻度が少なく、話も短く、画面上のものの名称のみで動詞や形容詞を使った説明が少なくなっていた。テレビを親子で一緒に視聴するのは情緒的コミュニケーションのきっかけにはなるが、言語的コミュニケーションは少なくなることが示された。長時間視聴が習慣的に続くと、言語や社会性の発達が遅れる可能性が考えられる。

視聴時の反応行動やコミュニケーションの生起は視聴内容によって異なるので、子どもの好みのビデオを集め、映像・音声・内容と言語発達との関係を調べた。1歳半で有意語をまだ話さない子どもの方が多く好んでいたビデオは登場人物の視聴者への働きかけが少ないので反応行動やコミュニケーションが生じ難いけれ



ど、途切れなく続き、画面変化が多く、大人が音を消しても見続け易いものが多いので子どもも見続けやすいものと推察される。有意語を話す子どもたちに好まれていたビデオは、成人が視聴しても視聴者に語り掛けている場面で前頭前野が活性化していた。有意語をまだ話さない子どもの方が多く好んでいたビデオは、成人の前頭前野の活性がほとんどみられなかった。このような働きかけがないけれど変化が多いビデオを長時間傍観的に見ているのではないだろうか。

映像メディアの普及は、授乳時の親子関係にも影響しているようだ。現在調査中だが、授乳時にテレビを時々見る母親の率は72%、携帯を時々使う母親の率は46%を占めていた。授乳時にテレビや携帯をとくとき、またはいつも使用する家庭では、授乳中に目が合わない、誰も居なくても泣かないなど、親子関係が希薄な傾向がみられる。

以上をまとめると、赤ちゃんは自分に笑顔で働きかける人に最も興味をもち、関わりの中で、発達する。しかし、現代社会は赤ちゃんの対人経験が物理的に減少している。赤ちゃんにとって働きかけられることが重要であることを、家族も社会も認識する必要があるだろう。

日本グッド・トイ展示会

子どもたちの健やかな発達成長には、栄養が不可欠である。その栄養は「食事」からだけでなく、「遊び」からも得られる。子どもは遊びを通じて、心や体の能力を高め、広い世界へと想像の翼を羽ばたかせ、自身についても知るようになる。遊びの中、個性が育み、自主性や忍耐力が自然と身に付き、いろいろなことを学んでいく。そして、子どもにとって大切な「遊び」に欠かせないものが、おもちゃである。

私たち大人は、おもちゃを、感性や想像力、好奇心の育成を手助けしてくれる大切な道具と考え、子どもの成長に合わせて、五感でさまざまな刺激をキャッチし、もてる可能性を引き出してくれるおもちゃを選ぶことが必要である。

この展示会は、東京おもちゃ美術館館長、日本グッド・トイ委員会理

事長の多田千尋氏の監修のもと、日本で流通するおもちゃの中で、優秀な玩具に贈られる「グッド・トイ賞」受賞作品の中から、心や身体の成長に必要な「イマジネーション力」「自然や科学への好奇心」「音楽・ア

トな感性」「運動能力」「コミュニケーション力」の栄養素を育むことができるものを50数点厳選し、紹介した。

2009年11月2日、3日の二日間にわたり、東アジア子ども学交流プログラム会議と合わせて、中国上海の華東師範大学にて、この展示会が開かれた。大学の学生や教師を中心に、2日間で延べ500名ほどの

来場者があり、熱心に見学している姿が印象的であった。

中国おもちゃ専門家である華愛華先生がある一つの積み木玩具に魅了された。それは、黄色・オレンジ・赤・青・緑と、カラフルな四角立方体のパーツが揃っている積木である。

「子どもの発想ひとつで、さまざまな積み方ができて、立体パズルのように組み立てられる。このようなおもちゃは、子どもの想像力を育てるのに役立つ。

また木の手触りもなめらかで、色が鮮やかであることから、子どもたちの興味関心を引き付ける効果も高いと思う。中国の幼稚園もこのような高品質なものをもっとたくさん取り入れていきたい」と感慨深げな様子であった。

今回の展示会は2日間という短い期間であったが、日中の学者や大学の学生が、「子どもとおもちゃ」、「子どもの遊びと学び」について考えるひとつの機会となった。

GOOD TOY



2009年11月2日 第5回上海初日

小林先生の講演に関して

- 小林先生の話を聞いて、人間の脳は三つの形成段階を経ること、子どもに喜びいっぱいの環境を作るべきであることがわかった。
- 人間の脳の歴史的变化と発達のメカニズムから人間の情動がどこから生まれたかを話してもらい、人間の生物学的側面からの科学的な根拠があり、納得できる内容だった。
- 解剖学と医学の角度から人間の情動が生まれる原因を説明することは考えたことがなかったので、とても勉強になった。

朱先生の講演について

- 理論の基礎、実践の研究とデータの分析が揃っている。実際に、子どものメンタルヘルスを改善することもでき、より健康な状態であればせることができると思う。
- このコース (Zippy's Friends) は全国規模で展開するのがよい。こ

会場の声

のコースを幼稚園の日常コースに取り込み、応用することはできないかと思った。

渡辺先生の講演について

- これは教育理念を科学技術に取り込んで、テクニクを教育の手段と方式として利用する斬新な発明であり、「ヒト」を重視し、「ヒト」のための発明だ。
- 「花つば」はとてもユーモラスで面白い。
- ハイテクニク的手段を駆使し、人を引き込む技術を研究している、将来性がある。
- コンピューターによるインタラクシヨンの技術と関連商品の出現は、人間と人間の間のコミュニケーションに悪影響をもたらすこ

とはないのか。

山本先生の講演について

- すべてが印象深かった。細かいところから文化の差異を観察するのは興味深いことだ。
- 同じことに対しても文化背景が異なったら見方も違う。でもそれは正しいかどうかの問題ではない。
- 「所有行為」「所有意識」から中日の差異を分析して、とても興味深い。短い時間で中日文化の差異を教えてもらい、いろいろな角度から理解することができた。

沈先生の講演について

- ベビーマッサージがとても重要であるにもかかわらず、親にはまだ

十分に重視されていないようだ。どうすればよいのか、アドバイスがほしい。

- 母親のアタッチメントが赤ちゃんの気持ちに深い影響を与えることがわかった。ベビーマッサージの技術と注意事項についてもっと知りたい。

周先生の講演について

- 高学歴、高収入の親たちが直面した困難と挑戦を提示し、親が軽視しがちな子どもの社会性と感情面などを問題として取り上げられ、興味深かった。
- 緻密な調査を通して得た結論。最も印象深いのは、両親が自らの手で育てた子どもと祖父母の手で育てられた子どもは異なるということだった。

2009年11月3日 第5回上海2日目

華先生の講演について

- 講演の内容と実際の教育と密接な

関係があるので、今後の仕事に役立つ内容であった。

○異なる角度から「遊戯と教育」の関係について論述し、その矛盾についての説明はとてもわかりやすかった。

谷村先生の講演について

○実験データを通して、乳幼児は目を合わす、自分に笑う人に興味を持つということを立証し、大人は積極的に乳幼児とコミュニケーションをとる重要性を示している、説得力があった。

○子どもとテレビについて、現代社会と密接に結びついた講演だった。パワーポイントの資料もとてよかった。考えさせられた。

○興味深い研究であった。乳幼児番組制作、おもちゃ制作についても考えさせられた。

子ども学について

○子どもを科学的な観点から見て、各分野の研究現状と問題を把握で

きるからこそ、対策を考え出し、養育環境を発展させることができると思った。

○子ども学の講演は興味深い。脳、心理、健康、機械(科学技術)、比較(日本と中国)などたくさんの方の角度から問題を分析するので、大変勉強になった。

○子ども学の研究は専門家たちが子どもの発達に関心を持っていることを示した。でも、中国政府の子ども学への投資は遅すぎであり、かつ少なすぎる。これから状況が変わり、もっと多くの研究者が参加することを期待している。

○「子ども学」という理念はとって斬新で、子どもに対する専門的な研究は、生き生きとしている。

○さらに科学的な研究方法はあるが、量的な研究と質的な研究を融合し、データの裏の事実を明らかにすべきである。

日中の交流について

○日中文化背景の差異についてももっと知りたい。研究の結果をよ



り深く理解したい。

○このような交流は他国、他学問の教育に関する理念にふれることができ、今後の教育にたくさんの方のヒントが得られた。

○幼稚園教師の育成についてのテーマがほしい。他の国の幼稚園教諭の養成の事情や中国と異なる点、

参考になる点は何かを知りたい。

○両国の専門家が定期的に交流するのが大変有意義だと思う。中国は理論的なものを重んじ、日本は研究と発明に力を入れているので、交流は有効である。

「子ども学」関係用語一覧(日・英・中対照)

●子ども学 (Child Science, 中国語訳: 児童科学)

育児・保育・教育を中心に各分野の研究者が学問の壁を超え、一堂に集まり、子どもに取り巻く諸問題を検討し、解決に導くような糸口を探る。人文科学と自然科学の叡智を結集し、医学、脳科学、発達心理学、社会学、教育学など各分野の融合をはかりながら、環学的な構想のもとに構築される新しい学問。また、日本、中国のみならず、国際的なネットワークを構築し、国の枠にとられない研究交流活動を行うことが特徴である。

中国語では「児童科学」と訳し、「科学」的に子どものことを考え、子どもの生物学的な側面と社会的な側面の両方を重視していく考えを反映している。

●チャイルドケアリング・デザイン (Child-Caring Design, 中国語訳: 关爱儿童设计)

子どものことを考え、子どものためにやさしい目をもって「子どもを生きる喜びいっぱいにする」グランド・デザイン。この考え方には教具、玩具、建物のデザインのみならず、教材カリキュラム、法律、社会全体のデザインなども

含まれる。

チャイルドケアリング・デザインは貧困地域の子どもたちにとって必要だと言われているが、豊かな国々の子どもたちにとっても必要不可欠な考え方であり、その核となるのは学問としての「子ども学」である。すなわち、この考え方の実現には、各専門家の学問の壁を超えた協力が求められる。

●脳科学と教育 (Brain Science and Education, 中国語訳: 脑科学与教育)

日本の文部科学省は「脳科学と教育」の研究に関する検討会を立ち上げ、「教育の場における課題に対して脳科学をはじめ関係する科学は如何なる貢献ができるのか」という観点から検討する」とした。科学技術振興機構 (JST) では、2001年～09年の間で、「脳科学と教育」という研究プログラムを立ち上げ、「発達関連の多様な課題を対象とし、先端技術・自然科学と人文学・社会科学を架橋・融合した Transdisciplinary (環学的) な視点から取り組むことと、教育関連課題の根幹に迫ることを目指す」と目標を掲げた。

また、ハーバード大学の P.W. Engle 教授を中心に、国際的に

著名な教育学者により The International Mind, Brain and Education Society (IMBES)、日本語では「国際心・脳・教育学会」とでも呼べる学会が2007年に設立され、学会誌として「Mind, Brain and Education」誌が年4冊発行されることとなった。脳科学と教育の研究はグローバル的な展開を見せており、各国の研究者に影響を与えている。

●情動 (emotion, 中国語訳: 情绪)

日本語として日常的にはあまり使われないが、英語 emotion の訳語として、古くから学術用語として使われてきた。情動は脳の内側にある古い脳である「大脳辺縁系 (limbic system)」と密接な関係がある。大脳辺縁系の中でも、扁桃体 (amygdala) が情動の発現に重要な役割を果たしていることが、これまでの研究で明らかになっている。

●早期閱讀 (中) (Reading, 中国語訳: 早期読書)

中国語では、書面の資料から情報を得る過程を「閱讀」という。書面資料は文字を中心としているが、記号、図表なども含まれる。早期閱讀は幼児期の閱讀を指して

いる。幼児の興味関心を考慮し、彼らに適する絵本や図書などの素材を選び、子どもが自ら本を読んだり、大人が読み聞かせをしたり、また本についての感想や意見を表現したりする活動などを指す。子どもは閱讀することによって、本を好きになる、閱讀経験を通じて、読書習慣を身につけさせることを目的としている。

●遊戯 (play, games, 中国語訳: 游戏)

「遊戯」には、大きく分けて、頭を動かすもの (知的遊戯) と体を動かすもの (スポーツ系) がある。たとえば、前者には、将棋、積み木、トランプなど。後者には、かけっこ、リレー、ボール系スポーツなどがある。これらの特徴は、グループ単位で行い、ルールや情景などが付属され、競争性を伴う。ゲームもその中の一種である。

「遊戯」、中国語では、通俗的に「玩 (ワン)」ともいう。楽しいこと、娯楽を指し、子どものルールの有無に関係なく遊ぶことを指す。本来、「遊戯」と「玩」を区別して考えていなかったが、中国の一部の幼稚園では、「遊戯」を教育カリキュラムの中に取り入れることを強調し、「遊戯」の教育効果を

強調するあまりに、「遊戯」の本質がゆがんでしまい、幼稚園生活では、「遊戯のせいで、遊ぶ時間がなくなった」という皮肉な結果を招いた。

●陳鶴琴 (Chen Hegin) と倉橋惣三 (Kurahashi Souzou)

陳鶴琴 (1892-1982) は、近代中国における著名な教育家、児童心理学者、中国幼児教育の創設者。中国のフレイベルと呼ばれている。彼は青年時代にアメリカに留学し、ジョン・デューイの教育思想に触れ、モンローおよびキルパトリックの指導を受けた。アメリカ留学から帰国後、南京鼓楼幼稚園を創設し、中国の幼稚園の歴史を切り開いた。

陳と同じ時代に生きる日本の幼稚園の父で、日本のフレイベルと呼ばれる倉橋惣三がいる。倉橋惣三 (1882-1955) は、日本における著名な教育家、児童心理学者であり、日本最初の幼稚園、お茶の水女子大学付属幼稚園の創設者。

日中両国でフレイベルと称された二人であるが、多くの共通点がある中で、当然異なる主張も見られる。両者の比較研究により、日中幼児教育の原点が明らかになる可能性が示唆されている。

東アジア子ども学交流プログラムの概要

■開催趣旨：育児・保育・教育に関係する東アジアの大学、教授の相互交換講義を支援し、子ども学の普及と国際化を目指す。その結果、子どもを取り巻く諸問題の解決や環境改善に役立つような学術活動を推進する。

■主催：チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）、華東師範大学

■共催：(株)ベネッセコーポレーション
ベネッセ次世代育成研究所

■後援：中華人民共和国駐日本国大使館、日本子ども学会、日本赤ちゃん学会、異文化比較学会、日中教育交流会議など

■事務局：チャイルド・リサーチ・ネット
(<http://www.crn.or.jp>)

本プログラムは、2007年11月に上海華東師範大学で発足し、長沙、東京、杭州の開催を経て、2009年には、東京、上海で活動を行いました。本書は2009年の報告です。

[発 行 日] 2010年3月31日

[発 行] チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）
〒101-8685
東京都千代田区神田神保町1-105
神保町三井ビル
(株)ベネッセコーポレーション内

[編 集 人] 後藤憲子

[編集スタッフ] CRN事務局（劉 愛萍、横井理絵、
岩崎菜穂子、桜井玲子）
木下編集事務所

[デ ザ イ ン] 森一典デザイン事務所、富田淳子



日本語版 <http://www.crn.or.jp>

中国語版 <http://www.crn.net.cn>

英語版 <http://www.childresearch.net>

チャイルド・リサーチ・ネットはベネッセコーポレーションの
支援のもと運営されています。